
Mr konann edogawa

チャーリー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Mr konann edogawa

【Nコード】

N8640N

【作者名】

チャーリー

【あらすじ】

江戸川コナンになって三年、ひとつの転機が訪れる。黒の組織のテロ対策ユニット<CTU-typeB>ができたのだ。コナンは協力者としてアメリカに向かう。はたして彼の運命はどうなるのだろうか。そしてコナンの恋の行方は。

第一部第一話

桜が散っている通学路を、三年前より大きくなった五人が仲良く歩いている。

新学期が始まるこの日、工藤新一こと江戸川コナンは、もうすぐ訪れる壮絶な戦いなど予想もしていなかった。

体が小さくなって小学一年生の生活が始まったのもつかの間、すでに四年生なってしまう自分に多少の危機感を感じていた。

灰原が口を開いた。

「あら、どうしたの？いつものキザな名探偵さんの顔じゃないわね。」

コナンが口を開いた。

「最近思っんだ。もう二度と元の体には戻れないんじゃないかってな。」

「あらあたしを信じてないようなこと言うじゃない？」

「別にそういう意味では言ってねーよ。今まで何回か組織と戦ってきたけど、一回としてあの薬のことにはたどり着けなかったしな。まあこんなこと言ってるようじゃオメーを守れないかもな。」

こんな調子で始業式の今日は早く学校が終わったので、灰原が博士の家に彼を呼んだ。

「どうしたんじや新一、今朝弱気なことを言っていた哀君が心配してたぞい。」

「わりーな。博士まで心配させちまって。」

しばらくの沈黙。とするとコナンの携帯が鳴った。コナンは席をはずし、電話に出た。

「ハイ、クールキッド、お久しぶりでーす。」

「ジョディ先生。どうしたの。」

電話の主FBIのジョディ先生だった。この電話がすべてのはじまりだった。

「大ニュースよ。」

「どうしたの、そんな急なこと?」

「ええ、合衆国政府が本格的に組織壊滅に乗り出したの。それで、CIAやFBIなどの関係者による黒の組織のテロ対策ユニット、<CTU-type B>がロサンゼルスにできたの。パーマー元大統領と、彼がもつとも信頼する人物ジャック・バウアーによってね。」

「それ本当なの?」

「ええ、それで聞きたいんだけど、あなたこっちに来ない?もちろん命の保障はできないわ。ただジャックもあなたに興味があるよう

だし。」

「わかった。行ってやるうじゃねえか！アメリカになー!!」

「ただし条件があるわ。」

その条件はとても過酷なものだったが、コナンは

「組織を倒すためなら話すよ。」

「そうわかったわ、じゃあ気をつけて来てね。」

「うん、それじゃあ」

コナンの瞳はいつもの探偵の瞳に戻った。そして博士と灰原にこのことを告げた。

「何じゃと、それは本当か新一!？」

博士が最初に口を開いた。

「ああ、ただ条件を二つ出されたよ。」

「条件？」

「ひとつは、灰原を連れてくること。もうひとつは俺たちのことを洗いざらい言うこと。」

「ちょっと待って、なんで私まで行かないといけないの?」

灰原が声を荒げた。当然だろう。コナンもこの答えは予想していた。灰原の言葉にコナンは

「確かにそうだ。だけどCTUの人たちはみんな例の薬のことまでつかんでいるんだ。この機を逃すてはねーぜ。」

「そう・・・じゃあ仕方ないわね。」

「じゃが一体向こうではどうするんじゃ。」

「幸い本部はロサンゼルスだ。だから、父さんと母さんの家に泊まるよ。」

「で、いつ発つの。アメリカに。」

「なるべく早くしたい。それに俺と灰原のことを話して、出国審査をパスできるように先生に言っておかないとな。」

コナン心に渴きを知らない好奇心がわき出していた。

第一部第一話（後書き）

はじめて書きました。ほぼ頭にスツと浮かんだ通りに書いているので、ミスもあるかもしれませんが、読んでください。

第二話

「で、その探偵さんはこれからどうしようとしているの？」

「そうだな、まずおっちゃん、蘭、服部、父さんと母さんに事情を説明しなきゃな。もちろんおっちゃんや蘭には本当のことは言えねーからな。両親がオメーと俺を引き取ってアメリカで生活するってことでつけていくよ。後学校は蘭たちの理由でアメリカへ転校するって博士に話をつけてもらうよ。」

「確かにそれが一番大事じゃな。よしわしに任せておけ」

「頼んだぜ、博士。」

とここでまたコナンの携帯が鳴った。

「ハイ！クールキッド！哀ちゃんにはちゃんと話しましたか？」

相手はコナンの予想に反せず、ジヨディ先生だった。

「ああ、話したよ。で、さっきの条件も受け入れてくれるらしいよ。」

「そお、よかったわ。ところでこれからあなたたちはどうするの。」

「とりあえずアメリカへ行くことをみんなに言うよ。」

「そつとこゝろで何か問題はないかしら。」

「実はとても重要な問題があるんだ。」

「重要な問題？」

「実は僕と灰原はパスポートを取ることができないんだ。」

「なぜ？」

ジヨデイは感慨深く言うと、コナンが決意を固めていった。

「僕たちは今の姿が本当の姿じゃないんだ。」

「どづいうこと？」

「僕の正体は、高校生探偵工藤新一なんだ。」

「何ですって！」

ジヨデイが驚きの声をあげた。当然だろう。まさか人間が約十歳も若返るなんて常識では考えられないことだからだ。

「でもなぜそんな姿に!？」

コナンはあの日のことを話した。トロピカルランドの事件で遭遇した黒づくめの男のことを、その男が取引をしていたので影に隠れて一部始終を見たこと、すると後ろから来た男に襲われ例の「ATP X4869」を飲まされ体が縮んだことを。

「そうだったの。じゃあ哀ちゃんは何者なの？」

「それは彼女の口から直接言うほうがいいと思います。」

そう言うと、灰原に携帯を渡した。

灰原は正直に話した。本名が宮野志保ということ、組織の一員だった両親の影響でコードネーム「シェリー」として新一が飲まされた薬「ATPX4869」を開発したこと、唯一の家族だった姉明美を殺され組織に反抗し監禁され自分も「ATPX4869」を飲んで体が縮んだことを。

「そうだったの。じゃああなたたちの本名工藤新一、宮野志保で出国審査を受けるのは危険ね。そういうことならジャックから政府に言っって何か策を立ててもらおうように働きかけてみるわ。」

「ありがとうございます。」

「じゃあ詳しい日程が決まったらまた連絡するわ。GOODLUCK」

そう言っって長い電話が終わった。

「で、何だっって」

「アメリカ政府が日本政府に俺たちを出国するように働きかけてくれるみてーだ。」

「そう、さすがに国家間の機密ともなればさすがの彼らも手だしできないでしょうしね。」

「ああ、それに迎えに来るのはジャックらしいしな。」

「そのジャックとは何者なんじゃ。」

「ジャックバウアー。パーマー元大統領が最も信頼する強い愛国心と正義感を持ち、いざとなったら手段を選ばず行動するたくましい男だ。」

「なるほど、彼なら何が何でも君たちを守ってくれそうじゃな。」

「で、彼はいつこっちにくるのかしら？」

「わからねーけど、そう遠くないと思うぜ。やつと顔を合わせるの
はな。」

「まあ楽しみしてるわ。パーマーがもつとも信頼する男をね。」

「それより新一、早く蘭君たちにこのことを知らせたらどうじゃ。」

「そうだな、じゃあ俺はいったん探偵事務所に戻るけど、何かあつたらすぐに連絡しろよ。特に灰原は気をつけるよ。」

「ええ、頼りにしてるわよ、探偵さん。」

「じゃあな。」

そう言ってコナンは探偵事務所に向かっていた。途中彼は命にかけて組織立ち向かって潰すことを、蘭をはじめとする仲間を絶対死なせないことを誓った。

第三話（前書き）

もともと前の二話この三話で一話分としようとしたのですが、残念ながら二話になってしまいました。長々しくてすいません。ページを開いてくれた方、つまらないかもしれませんが、最後まで読んでくれれば幸いです。

第三話

コナンは探偵事務所に向かっていた。思えば自分がコナンになってからは、彼らにどれほど迷惑かけたことだろうか？組織に背中を取られ命を奪われかけたこともあった。だからそんな彼らのためにもこの自分自身の手で組織を潰さなければと、心を奮い立たせていた。

「ただいま！」

コナンがいつものように子供らしい大きな声を出しながら探偵事務所の上にある毛利小五郎の自宅玄関のドアを開けた。すると奥のほうから先に帰っていた蘭の声が聞こえてきた。

「おかえり、コナン君今までどこに行っていたの！？心配したんだよ。」

いつも聞こえていた蘭の言葉。しかしそんな言葉を聞けるのも後何回もないことを悟っていたコナンはどこか名残惜しく思った。コナンは部屋にランドセルを置きトイレに入ると、早速今日のことを話す相手である西の高校生探偵服部平次と、工藤新一の両親である工藤優作、有紀子夫妻に電話をかけた。まずかけたのは服部だった。コナンは今日の出来事を服部に話を伝えると

「ホンマか！！それ！！」

とおなじみの大阪弁で言った。

「全部事実だよ。だから俺が日本にいられる時間はあまりないんだ。」

「そうやったんか。ほなまた連絡してくれや。見送りに行ったるさかい。」

「ああ、ありがとな服部じゃあな・・・」

「あ、工藤！！ちょい待たんかい！！」

「ん、なんだよ。」

「絶対に生きて帰って来るんやで。絶対やぞ！！」

「ああ、あたりめーだ、バ一口。じゃあな。」

そう言っつて電話を切った。

次に工藤夫妻に電話をかけた。

「ちょっと、新ちゃん！まさかそんなこと受けたなんて言わないわよね。」

電話を取っつて事情を聞いた新一の母有紀子が不機嫌そうに言った。

「ああ、もちろん受けたよ。」

「ちょっと新ちゃん！！あなた死にたいの！！それによりよって哀ちゃんまで巻き込んで！！あんた何様のつもり！！！！」

母親の厳しい言葉ががコナンの耳に刺さる。しかしコナンは

「政府が動いているんだ。もう後戻りはできねーんだよ！！だから・

「・・・だから・・・母さんたちは口を出してくるんじゃない！」

コナンが声を荒げた。もうコナンの精神年齢は二十一歳だ。いや彼が今までくぐりぬけてきた試練を踏まえるとそれより上かもしれない。そんな大人の風格と態度が伝わる言葉を聞いた有紀子は

「本気なのね、新ちゃん。そうよね、もうあなたは子供じゃないのよね・・・、新ちゃん・・・」

どんな困難にも立ち向かって成長してきた我が子への喜びと寂しさの涙を流しながら有紀子は言った。

「母さん、心配する気持ちも分からなくもねー。だけど・・・だからこそ、この俺の手でけりをつけなきゃいけないんだ！」

「でももう少しぐらいあたしたちのこと、頼ってよ。」

「大丈夫だって。これから母さんたちのことを頼らなきゃいけないこともあるかもしれないからその時はよろしく頼むぜ！」

「ええ、じゃそろそろ切るわね、またね新ちゃん！」

「ああ父さんによろしくな。じゃあ。」

かれこれ一時間はトイレで話していただろうか。気がつくとも夕食の準備が終ったらしくいいにおいが漂ってくる。すると

「コナン君！ごはんできたわよ！」

という蘭の声が聞こえて来た。そしてリビングに向かうとすでに蘭

と小五郎が座って待っていた。

「いただきまーす」

三人の大きな声がした。しばらくしてコナンが重い口を開いた。

「あのね、おじさん、蘭姉ちゃん、大事な話があるんだ。」

「何だよ。話って。」

「僕ね、灰原さんとアメリカへ行くことになったんだ。それで近いうちに両親の代理の人が日本に来るんだ。」

「そんな、何で急にコナン君と哀ちゃんがなくなっちゃうの？」

「今までやってきた仕事がこの前やっと終わったんだって。それで博士に電話して決まったことなんだ。」

「それじゃいつまでも他人の俺たちが預かっていたままじゃな。で、その代理っていつのはいつ来るんだ。」

「今日頼んだばかりだから、早くてあと四日か五日ぐらいかな。」

「そう、じゃあ向こうに行く前にお別れパーティーやらない？博士や光彦君たちも誘って。」

「そうだな、蘭明日あのじゃじゃ馬娘に頼んでみてくれ。」

「わかった。多分園子ならいい返事が聞けると思うわ。」

「ごめんね今までお世話になったのに、そんなことまでしてもらっちゃって。」

「ううん、いいのよ。だって新一がいなくなっただけで私のことを支えてくれたのは、コナン君だもん。きちんとお礼もしなきゃね。」

「ありがとう蘭姉ちゃん。じゃあ明日も学校だから寝るね。お休みなさい。」

「お休みコナン君。」

そう言ってコナンは布団をかぶった。そしてしばらくコナンの瞳には涙が流れていた。

第四話（前書き）

第三話ミスだらけだったんだんで訂正しました。ほんと変な文章ですが、読んでくれたら幸いです。後読んでいてお気づきな点があれば、どんどん言ってください。よろしく願います。

第四話

翌日、早速蘭は園子にお別れパーティーのことを話した。園子は

「えー！！あのガキンチョ二人がL.Aに転校する！！？。嘘、マジ
！！！」

と声を張り上げた。

「声が大きいわよ、園子。」

蘭がつぶやいた。

「まあ、蘭の頼みは断れないわね。いいわ、今日帰ったらパパに話
しとくわね。後のことは、この推理女王の鈴木園子様に任せなさい
い！！！」

「うん、ありがとね園子。」

こうしてコナンと灰原のお別れパーティーの開催が決まったのだっ
た。

ちょうどその頃、阿笠博士はとうと来るべき戦いに備えて、
「コナンのメカの改造および開発、そ
いて灰原の護身用のメカ開発を天才発明家と自負するにふさわしい
手つきで行っていた。特に今回は黒の組織が相手とあって大幅なパ
ワーアップを予定していた。その成果はまた後日としておこう。」

そして、コナンと灰原は残りわずかしかない帝丹小学校の生活を。

送っていた。この日もコナンは阿笠邸に立ち寄った。灰原が

「あら、愛しの彼女のところへ戻らなくてもいいの、探偵さん？」

と冷やかすと

「ああ、そうなんだけど何か見てもらえないんだよ。あんな寂しそうな蘭の顔をな。」

「だったら工藤新一として電話してあげたらいいんじゃないかしら。」

とコナンが寂しそうに言った。

「いや、工藤新一として電話をすれば、それこそ俺との別れがつかなくなるだけさ。」

「そうね。今の彼女にしてあげられることはないのね。私も、あなたも……」

しばらくの沈黙。すると、ここでコナンの携帯にメールが入った。「送り主<CTU-typeB>のジャックバウアーだ。」

「親愛なる江戸川……いや工藤新一君。はじめまして、CTU-typeBのジャックバウアーだ。あなたたちのことは、ジョディ捜査官から聞いています。今回、私たちCTU-typeBの捜査に協力してもらえることを大変うれしく思っている。」

さて、あなたたちの出国審査についてだがCTU-typeB総責任者デビットパーマー元大統領から日本政府に圧力をかけて、私と同伴なら出国審査をパスできる手を打ってもらった。そして君た

ちにはジョンキラー大統領から、宮野志保の一切の罪にはとわらないという正式な文書も頂いた。君たちは安心してアメリカへ来てほしい。

ところで私はチャーター機に乗って木曜日の夜に成田に着く予定だ。その後しばらく君たちの護衛をさせてもらいながら今後のことを話していくつもりでいる。とりあえず言えることは、出国は来週月曜日の早朝を予定している。そのつもりで準備してていてくれ。よろしく頼んだぞ。

ジャック

クバウアー」

「どうやら今週いっぱいが期限のようね。彼女パーティを計画しているんでしょう？日取りもあるし早めに連絡したほうがいいんじゃないかしら？」

「そうだな。じゃあ蘭連絡するから、オメーはジャックに返事をしておいてくれ。」

「はいはい」

コナンは灰原に携帯を渡し、博士の家の固定電話を手に取り、蘭に電話をかけた。

「もしもし、蘭姉ちゃん？」

「うん、どうしたの？コナン君？」

「実はね、代理の人から連絡があってアメリカに行く日が決まったんだ。」

「そう、で、いつなの？」

「来週の月曜日の早朝だったさ。」

「そう、じゃあ園子に頼んでパーティは土曜日にしてもらいましょう。服部君たちと、お父さんたちと、警察関係者と、探偵団のみんなど、博士には私から伝えるから。楽しみにしててね。」

「うん、じゃあよろしくね。バイバイ蘭姉ちゃん。」

「なるべく早く帰ってくるのよ。」

「はい。」

電話が終わると、コナンは電話を戻してソファにもたれかけた。

「こっちも終わったわよ。」

灰原がそう言うとコナンの座っているソファの向かいにある椅子に腰掛けた。

「いよいよね。もうちょっとで本当の戦いが始まるのね。」

「ああ、どんだけかかるかはわからねーが叩き潰すだけだ。」

「ふふ、期待してるわよ。探偵さん。」

「オウ、任せてけ。」

そう言ってコナンは灰原のほうへ行き、彼女の肩に手をかけた。

「ゼッテ―守ってやつからな。」

「……頼んだわよ……」

灰原がぼそつといった。そして二人は再びソファに戻り安らかなひと時を味わった。

第五話（前書き）

ジャックなどの24メンバーのセリフですが、英語だと思ってください。実際コナンと灰原は、ネイティブの英語を聞くこともしやべることができるので彼らの解釈だと思ってください。

第五話

「木曜日午後七時半。成田国際空港」

「ここがジャパンか。思ったより悪くないな。」

そう言っただけで到着口から一人の男が日本に来た。ジャックバウアーだ。

「確か予定では、>CTU-type B<日本支部の最高責任者が直々に来る予定だが。」

「お待ちしていました。ようこそ日本へ。ミスターバウアー」

「ああ、どうも。ミスターアカイ。」

「では、こちらへ。車を回してきます。」

「サンクス。」

そう言っただけで彼らは一路コナンのいる米花町へ向かった。その途中赤井の携帯に電話が入った。

「ああ、おれだ・・・何？それは本当か！・・・よしわかった。ジャックを届け次第すぐ作戦会議を行う。ああ、よろしく頼んだ。」

「どうした？」

ジャックが言った。

「日本に潜伏している組織の探り屋バーボンが今回の件に気づいて

ジンに連絡したところ、二人を抹殺するように言ったとキールから連絡が入りました。バーボンは更なる情報を求めて彼らに接近するでしょう。我々はパーティー会場および空港での警備を行うので、あなたには彼らの警護をお願いします。」

「了解。このことはLAの本部にも伝えてくれ。向こうから警備員および協力者の位置を日本支部経由で俺の端末に送れるように調整してくれ。本部の調整はクロエ。オプライエンで頼む。」

「わかりました。そう本部に連絡しておきます。」

「頼んだぞ。」

そうこうしているうちにジャックの拠点、米花町の隣杯戸町にある杯戸シティホテルに到着した。ここでジャックはパーティー前に二人に今の捜査状況や今後の動きについて説明するつもりだった。しかしバーボンが動いている以上それはできない。よって赤井の計らいで工藤邸で行うことになった。ジャックは彼らにメールを送った。

「明日の帰りにクドウ邸に寄ってほしい。重大な話がある。」

ジ

「ジャックバウアー」

翌日、コナンと灰原はいつものように学校へ向かっていた。今日の六時間目の学活では二人のお別れ会が行われる。もちろん担任で探偵団顧問の小林先生と探偵団三人の計画だ。

「オメーと学校に行くのはこれが最後か・・・」

「あら、あたしとじゃ嫌かしら。江戸川君。まあ今のあなたの心情

はこうでしょうね。もう愛しの彼女に見送られて学校に行けなくて寂しいってね。」

「バ、バァ口。そんなじゃねーよ。オメーまで俺を冷やかすのかよ、テメー。」

コナンがいつも同じように赤い顔で言った。しかしいつもよりも顔が赤くなっていなかった。

「そんなんじゃないってことは、今はどっという関係なのかしら？探偵さん？」

「別に、ただの幼馴染だよ。」

「そう・・・」

しばらくの沈黙。するとそこにいつもの三人がそろって声をかけた。

「おはよう、哀ちゃん、コナン君。」

「いつもながら、二人ともクールですね。」

「腹が減って何もしゃべる気がねーんじゃないか？。」

（それはオメーだけだった。）

「あ、そうだ。ちよつと灰原いいか？」

「何かしら？」

そう言うと灰原の耳元でこつ囁いた。

「帰りに俺んちに来てくれねーか？ちょっとジャックが話をしたいらしいから。」

「あら、予定ではジャックと今後のことを話すのは明日のパーティーの前じゃなかったかしら？」

「その予定だったんろうけど、昨夜連絡がきた。どうやら俺たちのことがやつらにバレそうなんだ。」

「仕方ないわね。じゃあ帰りも一緒ってわけね。」

「別にんなことまで言ってねーよ。おい急がないと遅刻しちまうぞ。」

そして六時間目を迎えた。たった四十五分しかないこの時間に今までの思いを込めるかのようにみんなが二人との惜しんだ。最後のお別れの言葉は歩美、光彦、元太からだった。

「哀ちゃん、コナン君離れててもずっとお友達だからね。」

歩美が頬に涙を流しながら言った。

「向こうでもお元気で過ごしてください。帰ってきたときはちゃんと連絡してくださいね。」

二人の瞳を見ながら光彦が言った。

「日本の飯が恋しくなったらいつでも俺んここに来いよ。ばっちり

御馳走してやるぜ。」

いつもと同じように元太が言った。

まあコナンは、日本の食事が恋しくなったら真っ先に蘭のもとへ向かうだろう。

「ありがとな、みんな。今まで楽しかったぜ。」

「ええ、あなたたちのことは決して忘れないわ。」

そして授業終了のチャイムが鳴り、二人が小林先生の両隣に立って挨拶をした。

帰り道。コナンが言った。

「何かと楽しかっただろ。今まで。」

「ええ、少しは楽しめたわ。それに・・・」

「それになんだよ？」

「別に、なんでもないわ。」

「はあ????」

(あなたと一緒にいれてよかったなんて言えないわよね。)

そんな会話をしながら、工藤邸へと向かった。

第六話（前書き）

今後ともよろしく願います

第六話

夕日の光が米花町をやさしく包み込むように指している。その中を二人の少年と少女が楽しそうにおしゃべりをしながら歩いている。それを後ろから追いかける男。二人は後ろを一回も振り向いていない。男は無線で状況を報告していた。

「ターゲットはまだこちらには気がついていないようだ。これなら作戦を実行できそうだ。」

「了解。何としても二人をジャックに会う前に消してくれ。キャンティ、コルン、間もなく二人がお前たちのスコープの中に入る。とらえ次第二人同時に仲良く逝かせてやれ。」

「オーケー。アタイに任せておきな。ジン。」

「俺、早く、撃ちたい。」

二人が角を曲がった。スナイパーの二人はじつくりと照準を合わせる。

「俺、女。」

「オーケー、アタイは男だ。」

二人は引き金に手をかけた。しかしその時だった。突然上空に警察のヘリコプターがやって来たのだった。

「ジン、頭上に犬のヘリが!!!」

「これ、やばい。俺たち、捕まる。」

「やむを得ない。キャンティ、コルンズらかれ。犬なんか捕まるなよ。」

こうして二人は計画を中止して下のバイパーに乗り込み、尾行を撒きながら引き揚げて行った。こうして組織日本支部の暗殺計画は失敗に終わった。

「バーボン計画は中止だ。引き続き二人をあたってくれ。」

「了解。」

そしてジンはアメリカにいる「あのお方」いわゆる組織のボスにメールを送った。

「不測の事態につき計画実行不可能。例の二人とジャックが接触します。」

ジンは深いため息をつきながらウォッカに言った。

「日本支部に内通者がいるかもしれない。メンバーの素性を徹底的に洗い。」

「了解しやした。でもなぜ日本にいますか？あの方の方も調べたしたほうがいいんじゃないんですかい？」

「あの方が自分の周りで内通者を野放しにするわけがない。そしてこの作戦を知っていたのは、日本のメンバーと、向こうの一部の幹

部だけだ。CTUが幹部にNOCを仕込めるはずがないだろう。ということは必然的にこちらのメンバーというわけだ。どんな手を使ってでも必ず探し出せ。特にシエリー関係した奴は拷問まがいでもいいから吐かせろ。」

「了解しやした。」

そう言っつてウオツカは出て行つた。

(ネズミめ、必ず面を拝ませてもらうぜ。)

「さっきのヘリはなんだったのかしら？それにさっきから誰かにつけられてる気が・・・」

「ああ、おそらく奴らの仲間だ。それにさっきライフルのサーチライトが光っていたから多分俺たちを抹殺しようとしたんだろう。ジャックに会う前にな。」

「それほど警戒しているのね。ジャックバウアーを・・・」

「まあ詳しいことはあの人に会ってから聞こうぜ。」

「そうね。」

そしてコナンたちは工藤邸についた。そこには大柄なアメリカ人と今のこの家の住人沖矢昴が立っていた。

「ジャック？」

「君たちか。よろしく、ミスタークドウ、ミスミヤノ。」

「ああ、「こちらこそミスターバウアー。」

「よろしく。」

「ところで何で昴さんも一緒なの？まさかジャックと知り合い？」

「いや、彼は仲間だ。それに化けている奴がいる前で正体をばらすわけにはいかないからな。とっとと出てきたらどうだ？組織の探り屋バーボン！！」

「ふふふ、さすがCTU - type B日本支部最高責任者、赤井秀一。」

そこに出てきたのは紛れもなく赤井秀一の顔に変装した組織の探り屋バーボンだった。

「ならば取引をしようじゃないか？こっちが送ったNOCのコードネームと正体を教えるから、この場を見逃す。どうだ、悪い提案ではないと思っぜ？」

「ふん、お前たちの送ったNOCとはハイボールのことか？」

「なぜ、そのことを？」

「こっちのNOCの方がずいぶん優秀だからな。」

「だったら俺はどうすればいい？」

「そうだな、とりあえず中に入れてもらおう。話はそれからだ。」

「わかった。今からそっちへ行くうづうづう……」

「その必要はねーぜ。」

コナンは時計型麻醉銃をバーボンに撃った。

「おやおや、ぼーや。ずいぶ妙なものをもっているな。」

「まあな、こんな体で組織に立ち向かうには必要だからな。」

「さあ、早く中へ。」

こうしてジャック、赤井、コナン、灰原はバーボンを工藤邸に運んだ。そしてバーボンが目を覚ますのを待った。

第六話（後書き）

一話で話が動きすぎました。今日中にあともう一話載せられるように頑張ります。

第七話（前書き）

お気に入りに登録してくれたかた、本当にありがとうございます。
本日二話目、がんばります。

第七話

「しかしよくハイボールの一番弟子の二人のスコープから逃げ切れ
たな。」

ジャックが言った。

「実はバーボンがつけているのは二人とも気がついていたんだ。そ
れにあの時、後三歩歩いたら引き返すつもりだったんだ。サーチラ
イトの光が見えていたからね。」

「でも、引き返してもバーボンに捕まってしまうじゃないか。」

「うん、だけどあの時赤井さんもいたんだよね。」

「ああ、実は昨日の作戦会議でジャック接触すると知れば奴らも動
くと踏んで、私も警護をすることになったんだ。それで君たち二人
を尾行していたあの男を尾行していたんだ。まああるときLAから
の情報が十分遅かったら危なかったがな。」

「まあよかったよ。ところでバーボンは起きているか？」

「まだ寝たままよ。おそらく後残り十分ほどでしょうけどね。それ
よりどうして彼が赤井さんだとわかったの？まさか前から知ってい
たなんてことはないんでしょうね？」

「バーロン何じゃねえよ。これは赤井さんと水無怜奈さんの作戦だ
よ。」

「じゃあ、何であなたはわかったのよ？」

「沖矢昴のローマ字表記を並べ替えると、AKAI SYUBOUになる。BOUを一ど考えると、赤井秀一って訳さ。」

「さすがだな、ぼーや。今日君たちを呼んだのはこれからのことと、明日のことについて話すためだ。」

「そうだったんだ。」

「では、始めよう。今CTU-type Bには三つの支部がある。LA、NY、そして東京だ。それぞれの支部長はミシェル・デスラー、赤井秀一、そして、カレン・ヘイズだ。本部はLA。これはポスの潜伏場所だからだ。そして総責任者はアメリカ元大統領ディビット・パーマーだ。これから君たちは俺と一緒にLAの本部へ行く。そこでまず組織のロサンゼルス支部を潰す。しかし日本支部は黙っていないだろう。明日のパーティにも手を打ってくるはずだ。だから日本支部からは俺たちが全力で守る。」

「ああ、信じてるぜ。あんたたちのことをな。」

「なるほど、あなたたちなら大丈夫そうね。さあ、もう目は覚めてるんでしょ？ さつさと起きたらどう？ バーボンさん。」

「ふん、さすがだな。で、俺をどうする気だ？」

「お前からこれって聞いて聞きたいことはない。なので我々の要求を飲んでほしい。そうすれば君をホワイトハウスへ紹介してやる。」

「要求とは。」

「……………」

「なる。そういうことか。いいぜ。受ければ俺は自由なんだろう？」

「ああ、だが逆らったらどうなるか、わかっているな。」

「組織と同じ、だろ？」

「だったら厄介なことはするな。」

「はいよ。」

そう言つてバーボンを解放し、彼は工藤邸を去っていった。

「兄貴、明日杯戸シテイホテルで例のガキ二人のパーティーが開かれるという情報が探り屋から入りやした。」

「奴からの情報だな。よしあの方に報告しろ。」

「了解。」

数分後。あの方から指令が届いた。

「明日、例の奴らを確実に抹殺しろ。そうすればCTUは完全に機能が停止する。失敗は許されん。例のブツを使つても構わない。」

「よほどあの方は警戒されている。ジャックバウアー、赤井秀一、

そして例のガキども二人。あの方の命令だ。仕方ない。ウオツカ、例のブツを用意しろ。それから・・・と・・・もな。」

「でも兄貴、そんなの何に使うんですかい？」

「ひとつはわかるだろう。もうひとつはこの作戦に失敗した時の万が一の策だ。」

「了解。」

ウオツカはブツを取りに行った。ジンはキャンテイ、コルン、キール、ベルモットを呼んだ。

数時間後四人がジンの前に集まった。

「明日パーティーを襲撃する。ベルモット、お前はCTUに変装して中の様子を探れ。キャンテイ、コルン、お前たちはこのビルで待機だ。最悪そこから四人を殺れ。キール、お前は例のブツを持って侵入し、ブツをやった後マスクをして五分後に・・・。」

「これなら確実にあいつらを葬れるよ。」

「一人、でいい。俺、撃ちたい。」

「随分用心深いよね。」

「よしでは例の場所に明朝十時に落ち合おう。ベルモット、お前にはやってほしいことがある。このことは俺があの方に知らせる。」

「あいよ。」

そう言って三人は出て行った。

「何かしら、私に頼みたいことって。」

「……………」

「なるほど。で、それはどこに？」

「もうすぐウオツカが持ってくる。」

そしてウオツカが来ると、ベルモットそれを持って任務を実行した。

「はい、赤井だが。ふむ。なるほど。ならば……………では、幸運を祈る。」

「どうした。」

「LAからの情報だ。明日の奴らの作戦がわかった。」

「……………」

「ならばジャックは……………。君たち二人は……………。俺は……………。」

「よしそれで行こう。」

「ならば明日は早い。各自早めに就寝しよう。明日は午前七時にここに集合だ。君たちはチームが警護する。」

「うん、ありがと。赤井さん。」

「じゃあ、また明日。」

こうして一日が終わった。いよいよささまな思惑が渦巻く直接対決の時、
「お別れパーティー」当日を迎える。

第七話（後書き）

沖矢さんの設定は一応ことうしました。

第八話（前書き）

さあ、いよいよ対決です。僕のようなチンケな文章で申し訳ありませんが、お楽しみください。

第八話

(さあ私たちを止められるかしら？銀の弾丸君たち。)

ベルモットはハーレーで夜の街を駆け抜けていた。

ー午前1時ー

ベルモットがハーレーを降りた。場所は杯戸シティホテル。館内を警備しているCTUに気がつかないように慎重に作業をしている。

(これでよし。後はこれを置いておけば。)

ーその頃ー

「こちらバウアー。」

「赤井です。何者かが会場にいます。」

「わかった。すぐに向かう。」

ジャックは拳銃を取り出し、パーティー会場へと向かった。

暗い会場の中に一つの人影があった。男だ。どうやらCTUの間人らしい。

「怪しい奴を見なかったか？」

「いいえ、何か物音がすると思って来た時にはだれもいませんでした。」

「そうか、ひき続き搜索を頼む。」

「了解。」

そう言ってジャケットは会場を後にした。部屋に帰り赤井に連絡した。

「赤井、俺だ。」

「どうでした？」

「俺の着く前に捜査官が様子を見たらしいが、そのときにはもういなかったそうだ。」

「捜査官？」

「どうした。」

「見張り中の捜査官は、あなたに連絡した後全員私の傍にいました。」

「じゃあ誰だ？」

「おそらく、会場であなたが会った捜査官こそが侵入した組織のメンバーだったんだろう。そう考えると侵入したのはベルモットだろう。」

「取り逃がしたか。」

「ええ、もう遅いでしょう。」

こうしてベルモットの任務は無事に終了した。

「翌朝午前七時。工藤邸」

「よう、昨日はよく眠れたか？」

「寝れる訳ないでしょ。彼らが来るとわかっていて。」

「そんだけ言えるなら心配ないな。」

「まあ、せいぜいがんばるのね。」

（こいつほんとかわいくねー）

「おお、二人とも早いな。」

「赤井さん、ジャック。」

「実は君たちに言わなきゃならんことがあるんだ。」

「言わないといけないこと？」

「深夜にベルモットが一人でホテルに潜入した。」

「ベルモットが一人で潜入？」

「ああ、間違いないだろう。」

「でも何でわざわざそんな時間に？あの人なら普通昼間などの人が多い時間に来るのに。何かあるわね。」

「何かって何だよ？」

「さあ、ジンと任務で一緒になったこともないからわからないわ。」

「とにかく奴らは昨日の情報以外の作戦も立てている。気をしめて行こう。」

「ああ、ところでジャック？例の場所に仕掛けて来たか？」

「取り付けた。後はそいつからの情報次第だ。」

「よしでは幸運を。」

「俺たちに任せておけ。」

「ああ、頼んだぜ。」

「CTU-type Bです。私たちが警護を担当します。」

そうして、コナンたちはは鈴木邸に、ジャック、赤井両名はそれぞれの配置へ向かった。

その後コナンたちは園子の家でパーティで着る服を決め、蘭と園子の四人でホテルへ向かっていた。

- その頃 -

「来たな。ベルモットはすでに作戦に入っている。」

「ねえ、ジン。はやく行こう。」

「そうだな。キャンティ、コルン、この前のようなことは許されな

いからな。」

「ああ、わかっているよ。」

「では行くぞ。」

「わあー、コナン君、哀ちゃん、素敵よ。」

「まあこの鈴木園子様にかかれば・・・」

「うんありがとう。園子姉ちゃん。」

そついつて上機嫌に園子は控室を後にした。

「ねえ、蘭姉ちゃんは行かなくていいの？」

「平気よ。園子これから、リッチなイケメン男をゲットするんだー
って張り切っていたからね。」

(おいおいあいつに見つかったらどうするつもりだ?)

「今日はいい思い出にしようね。コナン君、哀ちゃん。」

「そうだね。」

- 13時 -

いよいよパーティが始まった。和やかなムードで時間はどんどん流れていく。

しばらくして一人の女が地下に向かっていた。清掃員にふんした彼女は地下の空調室に入っていた。そして鞆の中のを換気ファ

の前に置くと、起爆装置をセットした。その時、

「動くな……」

第八話（後書き）

結構省略してすみません。

第九話（前書き）

直接対決、第二話目。どうぞ読んでください。

第九話

「動くな。」

低い声がした。聞き覚えのある声だった。

「あら、生きていたのね。ライ。いや赤井秀一さん。」

「久しぶりだな。キール。」

女は男の方に顔をむけて言った。

「キールより、水無怜奈の方がいいんじゃない。それも偽名だし。」

「そうだな、では水無さんと言わせてもらおう。」

「それにしてもよくわかったわね。組織の日本支部の最終兵器であるこのことが。」

「LAからの情報だ。」

「ああ、CTUの本部の。でもなんでわざわざそっちから。」

「あっちのNOCはとてつもなく優秀でね。もうあの方の近くにいる。」

「だから、日本支部にNOCを潜らせなかったのね。」

「ああそうだ。こちらにNOCがいるとあの男が気づくのは時間の

問題。だから向こうの幹部を落したんだ。そうすれば向こうの拠点を攻撃するときにも役立つからな。」

「で、なんでここまで私を泳がせたの？これをやらなきゃ私は殺されてしまうわ。そうすればCIAの任務を妨害したことになるわよ。」

「あなたはもうCIAじゃない。あなたの今の所属はCTU - t y p e B - 日本支部だ。よってあなたは私の部下だ。」

「そうわかったわ。で、これから私は何をすればいいの？」

「とりあえず、その毒ガスと、解毒剤を同時に噴射しろ。そして我々の管理下に置かれ拷問され解毒剤のことを話したが、隙をみて逃げたとジンに報告しろ。そのあとは奴らの情報を日本支部に送ってくれ。あなたは俺たちにとって重要な存在なんだからな。」

「そう、わかったわ。じゃあこの辺に刺し傷でもつけてくれない。ジンに疑われたらまずいでしょ？」

「ではそうしよう。私はまだやることがあるんでね。」

「じゃあ。」

赤井は部屋を出てジャックに連絡した。

「こちら赤井。作戦どおりガスを確保した。そちらも一つ潰してくれ。」

「了解。」

ジャックは向かいにあるビルへ向かった。

「CTU本部」

分析官の電話が鳴った。そのデスクの女は受話器を握った。

「こちら、オブライエン。」

「クロエ、俺だ。」

「ジャック。」

「今から建物に踏み込む。映像を送ってくれ。」

「了解、回線はそのままです。」

「わかった。」

「……出ました。Aの建物の屋上に人影が。ゴルフバッグが二つあって、そのそばに男女一名ずついます。それ以外異常ありません。」

「了解。」

するとジャックは息をひそめ屋上に向かった。

屋上に出るドアの前についたジャックはドアの陰に隠れて。持っていた拳銃に消音器つけ弾を込めた。するとジャックはドア越しから二人に近づいた。

「銃を捨てる！！」

「何でこんなところに奴がいるんだい。」

「わからない、俺ら、ピンチ。」

そう言うと二人は両手を挙げた。

「ここにひざまずけ。」

「わかってるよ。」

「ジャックだ。二人を確保した。」

「了解。ほかの捜査官が行く。それまで見張っていてください。」

「ああ。」

数分後、二人の捜査官が到着した。ここで彼らにジャックが耳打ちをした。

「……………」

「わかりました。」

「頼んだぞ。」

そう言うとジャックはこの場を後にした。捜査官は排水管のパイプのところまで二人を連れ、手錠をつけた。

「これでよし。」

「じゃあ、配置に戻るか。」

「そうだな。」

捜査官はドアを開けた。

「くそ、このままじゃまずいよ。コルン。」

「わかってる。でも、俺、何も、できない。」

すると再びドアが開いた。

「あらあら、随分無様な姿じゃない。キャンテイ、コルン。」

「フン、あんたに助けられるのかい。アタイたちは。」

「ああ。でも、それ以外、手、ない。」

「じゃあはじめましょうか。」

「パーティー会場」

「大丈夫かしら。もう二時半よ。もう第一次攻撃が始まってる頃よ。」

「何もないってことは大丈夫なんだろう。」

「でも、彼らが内部のことを知る手もなしに作戦を実行するとは考えられないわ。」

「ああ、それにジンのことだ。まだ何か仕掛けてくるだろうな。ましてや赤井さんやジャックが目を光らせていることを知っていたらなおさらな。」

「何かって?」

「さあ、それはわからない。LAにもそれ情報については何も入ってないってジャックも言っていたからな。」

「あー、またコナン君と哀ちゃん、二人でヒソヒソ話してる。」

「最後の最後までそれですか。」

「そんなに大事なことがよ。」

(バー口、俺たちの命にかかわることだよ。)

「ねえ蘭お姉さん。コナン君と哀ちゃん、また二人で内緒話してたんだよ。」

「そっか。コナン君、そんなに哀ちゃんと一緒にいたいのか?」

「もしかして転校する理由ってそれじゃない?」

「バ、バー口そんなわけねーだろう。」

「そうやな、いくら女の子とお手をつなぎながら一緒にアメリカに行くって言てたって、そんな訳あらへんやろ。な、コ、コ、コナン君?」

「ああ、一言余計だがな。」

「それよりこのホテルのスタッフおかしいと思わんか？」

「どうしてだ。」

「……………」

「ああ、そんなことか。」

「工藤。お前その理由知ってるんか？」

「知ってるぜ。ただこのことは後でな。余計な心配すんなよ。」

「おい工藤、チヨイ待たんかい。」

「それは、あんたのほうや！」

「何や、和葉一体何やねん。」

「あっち見てみ。」

「ジーーーーー」

「服部さん、なんであなたまでコナン君とこそそしてたんですか？」

「いやあ、それは……………」

「悩み事が多いと余計黒くなるって母ちゃん言ってたぞ。」

「おいおい、ホンマにコイツら小学生かいな？」

そんな感じで時間は流れて行った。

- その頃 -

「どうやら失敗したようね、ジン。」

「ベルモット、例のブツを使え。」

「了解。」

第九話（後書き）

長くなってすみません

第十話（前書き）

これでこの対決は終りしたいと思えます。この後はパーティー後の二人を書こうと思います。

第十話

「バーボン、俺だ。」

「何だ、ジン。」

「今すぐエディンへ行け。ベルモットと交代で中を探れ。」

「了解。」

「兄貴、本当にやっちまうんですかい？」

「ああ、ガスの失敗は考えていたが、キャンテイとコルンが簡単に見つかる場所を選ぶとは考えられない。つまり、あらかじめあの場所は張られていたということだ。そしてこの情報を流したのは奴だ。つまり奴らの罠にはまったんだよ。それに俺は裏切り者は許さない夕子だしな。」

「まあ、殺されて当然というわけですかい。」

「ホテル内」

ベルモットは地下で機械の設定を行っていた。そこにバーボンがやってきた。

「早かったわね。」

「この近くにいたんでね。」

「じゃあ私はこれで、制服はあっちにあるから。」

ベルモットは部屋を出て行った。

「さて、じゃあ始めるか。」

「ジン、これから潜入する。」

「了解。」

そう言ってバーボンは持ち場へと向かっていった。

・その頃―

「いやあ、あの女もたまには役に立つね。」

「でも、俺、あいつ、嫌い。」

「ああ、本当ならここに来た時点で殺してるところさ。奴がNY支部の幹部何かにならなきゃな。」

「とりあえず、俺、早く、撃ちたい。」

「ああ、そろそろだな。」

―再びホテル内―

「ねえ、工藤君。」

「どうした、灰原。」

「何か聞こえない？テーブルの下から聞こえるわ。」

「どれどれ、これは！……」

「佐藤刑事……！」

「どうしたの、コナン君。」

「これを見て。」

コナンはテーブルの下を指刺した。

「これって、爆弾……！」

「ああ、間違いない。しかも爆弾の数は約五十個。残り時間は十五分。とても探してる余裕はない。ホテルの客を避難させて……！」

「どうしたの？コナン君？」

「そうかそうだったのか……！」

するとコナンは携帯を取り出し、電話をかけた。

「もしもし、赤井さん？」

「どうした、ばーや。」

「ホテル内の爆弾が後十五分足らずで爆発する。」

「早く避難を・・・!?なるほど。ジャックに連絡する。ジャックから連絡をするまで君たちはそれまでホテルを出るな。」

「わかった。」

「どうなってるの、工藤君?」

「奴らはこの爆弾騒ぎで非常口から出てきた俺たちを狙撃するつもりだ。」

「なるほど。」

「だから、俺たちが出る前にジャックに奴らの作戦を壊してもらおうのさ。」

「どうやって?」

「まあ見てろ。」

「残り十三分」

「俺だ。」

「ジャック、赤井です。」

「どうした。」

「奴らの狙いがわかりました。奴らは我々を非常口で狙撃するつもりです。急いで確保してください。」

「了解。クロエにつないでくれ。」

・・・

「こちら、オブライエン。」

「クロエ、俺だ。Bの建物にあの二人はいるか？」

「映像を出します。」

「急いでくれ！」

「出ました。Aにいたのと同じ人物です。」

「了解。」

「ホテル内」

「みなさん、時間はまだあるので落ち着いて避難してください。」
日暮警部などの警察関係者が誘導している間、バーボンは確認作業をしていた。

「ジン、三十個までは正常だ。」

「よしそのまま続ける。」

「了解。」

「屋上」

「なかなか出てこないね。」

「おれ、早く、撃ちたい。」

「コロン、今撃つたらアタイたちのことがバレて逃げられるよ。」

「わかった。俺、待つ」

すると背後から放たれた銃弾がキャンテイ、コロン、両者の足を貫いた。

「銃を捨てる!!!」

「ち、またあいつか。」

「俺、逃げる。」

「アタイもな。」

そう言つて二人は屋上から飛び降り、背負っていたジェットパックを使い無事に着地し逃走した。

・ホテル内ー

「もしもしジャック?」

「俺だ。あの二人は排除した。もう大丈夫だ。」

「わかった。ありがとうジャック。」

「灰原、後どれくらいだ!?!」

「残り二分三十秒よ。」

「よしギリギリ間に合う。行くぞ!!--!!」

そう言うとコナンは灰原の手を取り、階段を駆け降りた。

「よし出口だ。突っ込めー!!!」

「パリン!!。」

ガラスの割れる音がした。すると、

「ドーン!!!!!!!!!!!!!!」

すさまじい音を立てホテルは爆発した。

「はあ、はあ、はあ、はあ、」

コナンが荒い息を立てていた。

「大丈夫か？」

「ジャック!ああ、平気だよ。」

「そうか、でもよくわかったな。奴らの爆弾がおとりだと。」

「奴らは一番確実な方法を使う。全員の位置を特定できない状態で爆発しても全員消せる可能性は限りなく低い。だからわかったんだ。奴らの目的は爆弾を爆発させることじゃなく、みんなを避難させることだって。」

「なるほど、さすがだな。」

すると後ろから声がした。

「コナン君。この人は。」

「この人が僕の両親の代理、CTU捜査官のジャック・バウアーさんだよ。蘭姉ちゃん。」

そしてジャックはコナンの仲間全員と握手をした。

第十話（後書き）

最後の音の表現が雑ですみません。

第十一話

「それにしてもコナン君の両親の代理ってジャックだったなんて。」

「この子の両親とはもう十年来の付き合いでね。それにちょうど日本に行く用事があったから迎えに来たんだ。」

「ところでよ、このおっさん何者なんだ？」

「ええー！元太君知らないの!？」

「彼は、アメリカテロ対策ユニットに所属する、スーパー捜査官ですよ。彼がいたから、パーマーさんは今までやってこれたといっても過言ではないでしょう。」

「いや、大統領は本当に優秀なお方だ。だから私は彼に忠実だし彼に協力する。」

「お二人はすごい信頼関係なんですね。」

「おい、そう言えば、コナンと灰原は？」

「彼らは赤井さんに連れられて手当を受けているところだ。もうそろそろこちらに来るだろう。」

ここで、ジャックの携帯が鳴った。

「bauer。」

「ジャック、ミシエルです。」

「何だ。」

「ホテル爆破に使われたのは北朝鮮製の爆弾と判明しました。」

「責任はあつちに押しつける気か。」

「大統領は報復すると言っていますが、どうでしょう?」

「大統領につないでくれ。」

「了解。」

「ジャック、どうぞ。」

「大統領、私です。」

「ジャック、無事かね。」

「ええ、それより今すぐ現地に報告し、情報提供に協力するように説得してください。報復はその脅しで十分です。」

「うむ、私も同感だ。しかしジャック、閣僚たちは早急な対応を求めている。」

「ならばその閣僚を私が説得します。」

「一人頼みたい人物がいる。」

「それは……。」

「ジェイムズ・ヘラー国防長官だ。」

「わかりました。」

「ではつなぐぞ。」

「お任せください。」

・その頃―

「あなたと手をつないで逃げるときは、いつもガラスから飛び出るわね。」

「しゃーねーだろ。あれが一番早かったんだからよ。」

「まあ、いいわ。ちゃんと守ってくれたしね。」

「バー口、まだ始まったばかりだ。先はまだ長いぜ。」

「これから何回お世話になるのかしら？工藤君。」

「何回でもいいさ。それが俺の役目だからな。」

「あつ。」

「ん、どうした？オメー顔赤いぞ。」

「別に赤くなつてなんかいいわよ。」

「そうか。」

「あなたこそ少し赤くなつてるじゃない。まさか……。」

「バーク、女の子にそんな真剣な目で見つめられたら……。」

「目つきの悪い子でも？」

「いやさっきのお前の目は恋する女の子の目だったぜ。」

「バカ。」

「さあてそろそろ正体を暴こうじゃねえか。こいつのな。」

そう言うと、目の前の人物を指差した。

「何でこんなところにいるんだ、コソ泥さん。」

「そう言う君こそ、彼女に何見とれてるんだ？」

「こつちの質問が先だ。」

「へえへえ、わかったよ。実は俺もあの組織を追っていたんだ。それで今日ここに集まるって情報を手に入れて、こつそりCTUに紛れ込んだって訳さ。」

「なら、協力しねえか？俺たちはこれからアメリカに行く。だからオメーは……。」

「了解。じゃあ今度はこっちの質問に答える番だ。」

「バ、バーロ！んなこと言えるかよ。と、とにかくこの話はノーコメントだ！」

「なら早くどっちにするか決めておけよ。二兎を追うもの一兎も得ずって言うしな。」

「放っておけ。」

「じゃあな名探偵。楽しんでこいよ婚前旅行。」

「ったく、好き勝手なこと言いやがって。あれ、灰原？どうした。」

灰原の頬は真っ赤だった。

（こ、婚前旅行？工藤君が蘭さんとじゃなくて、この私と？・・・
工藤君・・・）

「おい、オメー大丈夫か？」

「なんでもないわ。さあ、行きましょ。」

（おいおい、一体何だったんだ？まさかな・・・）

ー再びホテル前ー

「ですから、武力は外交には敵わないんですよ。」

「……。わかった。大統領の考えを飲もう。」

「ありがとうございます。」

「ただし、条件がある。」

「条件？」

「何、大したことじゃない。CTUをクビになったら私の元に来てくれないか？」

「わかりました。お引き受けします。それでは。」

ジャックは電話を切ると爆破されたホテルを見上げた。

（必ず、奴らを排除する。）

彼は誓った。

第十二話（前書き）

昨日はネタ切れ感マックスの話ですみません。時間があれば訂正したいと思います。みなさんに長く読んでもらえるように頑張るの
で、よろしくお願いします。

第十二話

「北朝鮮からの情報です。大統領。」

「どうだった。」

「はい、爆弾を盗んだとみられる兵は、先日の訓練で全員自殺しています。これでは関係者を当たる線も難しいと思います。」

「そうか。で、どうやって日本に入った？」

「ルートは不明ですが、政府内の関与者にいるかもしれません。」

「なぜだ。」

「どんな裏ルートも足が残ります。しかしそれがないということは裏の裏、つまり正規ルートを使った

としか考えられません。そう考えると必要不可欠かと。」

「確かに。政権内に裏切り者はいないだろうが、関与者はいそうだよしシークレットサービスに見つけてもらおう。」

「了解しました。我々は引き続きアジトの搜索を行います。」

「ああ、頼む。」

「では、失礼します。大統領。」

「任せたぞ。ミスターパーマー。」

大統領は受話器を置き、アーロンを呼んだ。

「何でしょう？大統領。」

「政権に爆弾輸送にかかわったとみられる人物がいるかもしれない。貨物の無チエック用の書類を全力で当たってくれ。」

「わかりました。」

「とくにあの国に近い国は徹底的に調べる。」

「了解。」

大統領執務室からアーロンがでた。大統領は危機の余韻の休息に入った。

・阿笠邸ー

パーティーのあとコナンは一度阿笠邸に寄ることになった。

「しかし、危なかったのう。」

「ああ、LAからの情報も80%は完璧だったんだけど。」

「じゃあ、君たちは待ち伏せしていたということか。」

「ええ、そうよ。」

「なら、どうして教えてくれなかったんじゃない？」

「ワリーな、博士。でもこれは危険な作戦だ。簡単に言うわけには
いかなっかたんだ。」

「それにしてもCTUは彼らの手がわかったのう。」

「わかって当然よ。」

「どうしてじゃ？」

「本部にはボスの右腕といわれるNOCがいるんだ。」

「なるほど、ジンたちの情報はその人によって筒抜けじゃったとい
う訳か。」

「それに今回の爆発にはもう一つの目的があったんだ。」

「もう一つの目的？」

「裏切り者の始末だよ。」

「う、裏切り者じゃと。」

「ああ、バーボンが俺たちに利用されて情報を流したことがジンに
バレたんだ。それでジンはCTUに紛れ込ませ爆弾の確認と偽って
奴をホテルの中に閉じ込めた。」

「そうじゃったのか。それにしても本部のNOCはすごいのう。」

「ああ、赤井さんが潜入した時はジンドまりだったからな。」

「赤井さんって、あの組織の一員だったの？」

「知りたいか、真実を。オメーが一番つらいことだぞ。」

「ええ、いいわ。」

「赤井さんは明美さんと諸星大という偽名で接触し組織潜入した。」

「ちよつと待って。それって……。その人のコードネームって、まさか。」

「ライだ。」

「!!!?」

「そう、彼が組織に入るのに利用したのはオメーだ。」

「何じゃと。」

「ああ、だからオメーは昴さん警戒したんだろう。もと組織の一員だった赤井さんが化けていたんだから。」

「そう、だったの。」

「実は赤井さんは、赤井さんは……」

「まだ何かあるの?」

「赤井さんは、明美さんの恋人だったんだ。」

「!?!?」

「それで……。」

「何?」

「いや、この先はあの人にしか言えない。俺も真実を知ったオメーを慰める側だからな。」

「そう。」

「……。」

灰原の瞳にじわり、じわりと、涙がたまっていく。今にも溢れそうな瞳の彼女をコナンはやさしく後ろから抱き締めた。心の叫びもとれる泣き声を出しながら、コナンの胸をつかみ泣いた。それはくしくも3年前と同じ状態だった。コナンはそんな彼女の背中に手を当て、自分の方に彼女の体を寄せた。

「ごめんな、こんなことになることなんてわかっていたのに。」

「んずつ、いいの、いつかは知るんずつ、ことだから……んずつ。それにあなたがんずつ、いれば。」

コナンはずつとやさしく抱きしめ続けた。彼女の心を深く染めている冷たい悲しみ。その悲しみさえもその温もりで温めているかのよう。

「工藤君……私……私。」

「いいんだ。思いつきり泣け。俺が全部受け止める。」

「それは蘭さんのための言葉でしょ？」

「バーロ、少しは素直に受け止めるよ。」

「……んずっ、バカ。」

夜はさらに更けていく。

第十二話（後書き）

哀ちゃん、キャラ崩壊しました。すいません。

第十三話

「工藤君、もう大丈夫よ。ありがとう。」

「わりーな。」

「あなたが言ってくれてよかったわ。」

「そうか。それより明日のことはわかってるよな。」

「ええ、明後日早いから明日はここに泊まるんですよ。」

「だけど客が来る。」

「客って。」

「それは明日のお楽しみ。じゃあ博士そろそろ帰るな。」

「気をつけるんじゃないぞ。」

「ああ。じゃあな。」

コナンは阿笠邸をでて、夜の米花町に消えていった。

(工藤君……)

灰原の体はコナンの温もりで十分に温められていた。

「顔が赤いのう、哀君。」

その赤さはコナンの温もりに温められたからか。それとも・・・

「博士、何言ってるの！もう寝るわ！！お休みなさい！」

（ムキになりおって。しかし新一はどっちを選ぶのじゃろう？）

博士は考えていた。最近のコナンの行動は、誰を一番に考えているのだろうか？コナンの目はだれを見ているのだろうと。

（どうしたんだろうな、俺は。）

無理もない。小さくなってからも新一は蘭を思ってきた。しかし、コナンの心は灰原を見ている。自分はどっちに正直になればいいのか。工藤新一として生きるべきなのか。それともこのまま江戸川コナンとして生きるべきなのか。夜の街がコナンの心を見とっしたような静けさに包まれている。その中は自分の足音しか聞こえない。そこで一人の人物に会った。

「もう、コナン君！博士の家で何やってたの！！心配したじゃない
！！！」

聞きなれた声。蘭だ。

「ごめん、蘭姉ちゃん。」

「なあ、早く帰るっ。」

「うん。」

思えば三年前。ジンに例の薬を飲まされ行くあてのなかった自分の面倒を見てくれた蘭。そこから江戸川コナン君の生活が始まった。ついこの間までつないでいた手は両足の脇にある。肌寒い夜に真冬のような空気が漂っていた。

「蘭姉ちゃん、今までありがとね。」

「どういたしまして。コナン君がいてくれて私とっても楽しかったよ。」

「僕もだよ。」

(そうだ、みんなの平和な生活を俺が壊してはならない。絶対に組織を潰す。)

コナンは静かにその闘志に火をつけた。

「じゃあ僕寝るね。」

探偵事務所に戻ったコナンが言った。

「待って、コナン君。」

「なに？蘭姉ちゃん。」

「一緒に寝ない？」

「えっ？」

大学生になって大人っぽさが出てきた蘭。その目はいつもと変わらないまっすぐな目だった。

「……いいの？」

「うん、お父さんには私から説明する。」

「じゃあ、布団持っていくね。」

「うん。私もちょっとやらないといけないことがあるから、先寝てて。」

「わかった、お先に、蘭姉ちゃん。」

コナン蘭の寝室に自分の布団を引くと、その中で静かに目を閉じた。

第十四話（前書き）

昨日は学校が早く終わったので、ネタ探し旅に出ていました。更
新できずすみません。

第十四話

朝。コナンは目を覚ました。しかし、背中が妙にあつたかい。

「ええ！！、な、何じゃこりゃ！？」

コナンは驚きの言葉を漏らした。コナンの全身を蘭の体で覆われているのだから。

（おいおい、んなとこおっちゃんに見られたら・・・頼むおっちゃん。来るんじゃないぞ。）

しかしその願いもむなしく・・・

「コラー！！何でお前が蘭のところで寝ているんだ！！！！」

その声に寢息を立てていた蘭も目を覚ました。

「お父さん、おはよう。」

「おはようじゃあねーえ！！！！蘭！！！！」

「もう、コナン君は悪くないのよ。私が誘ったんだから。」

「蘭、かばわなくていいぞ。今からこいつを・・・」

「ほんとよ。今大学に行っているんな男性に会ってるけどこの三年の悲しみを慰めてくれたのはほかでもない、コナン君よ。時には命をかけて私を守ってくれた。新一と同じように。」

「……………」

「何も言えないでしょ、お父さん。私はずっと新一を待っていた。会ってもアイツはすぐに事件だつて言つて私から離れて行った。そんな時はみんなが慰めてくれてた。でも、新一を待つてること応援してくれたのは……、三年間私を支えたのはこの子だった。」

「そうだったな。コナン、今まで蘭をありがとな。」

「おっちゃん。」

「それから悪いな、蘭。もうお前を寂しくなんかさせないからな。」

「それつて……………」

「今晚出かける。」

「お父さん!!」

「さあ、起きて朝飯作つてくれねーか。」

「うん、ちよつと待つてて。」

最後の朝に素直になった毛利家の人々。その未来は輝くだろうか。

「じゃあ、いくね。」

「気をつけるよ。」

「空港でね。」

ポアロの隣にある二階の探偵事務所に上がるための階段の下。スニーカーを転がして歩く少年に声をかける二人の親子。

「バイバイ。」

三人ともその背中には寂しげなオーラを出していた。

コナンの耳にはスニーカーのローラーとアスファルトの接する音しか耳には入らない。その静けさの中、コナンは阿笠邸に向かった。

「よう。」

「おう、新一。」

「どうしたんだ。目の下がクマだらけだぜ。」

「やっと完成したんじゃ。」

「完成？」

「感謝しなさい、博士に。あなたのメカの改良のために一週間ほとんど寝てないんだから。」

「新一のものだけじゃないぞ。哀君にも作ってある。」

「わ、私のために。」

「ただし、クイズに答えられたらじゃ。」

「おいおい。」

「まあ。しょうがないわね。」

「では、問題じゃ。江戸時代、もっともいきいきした職業をしていたのは士農工商の四つの出れじゃ？」

「結構難しいわね。」

「博士、こんなの作るくらいならほかのところに脳みそ回せよな。」

「もしかして、わからんのか？」

「バーク。今考えてるよ。」

果たしてコナンは正解できるのか。

第十四話（後書き）

このクイズ、もちろんダジャレです。

第十五話（前書き）

みなさん、クイズは解けましたか？少々強引かも知れませんがご了承ください。

第十五話

「答えは、商人だろ。」

「ぎく!!なぜわかった?」

「いきいきしている仕事つてのを、飽きない仕事に変換するんだろ。それで飽きない仕事は商い仕事になって答えは商人つて訳さ。」

「正解じゃ。さすが新一。」

「なあ、灰原。コーヒー入れてくれねーか。寒くてよ。」

「同感よ。待ってて。」

「さて新一。説明するぞ。一つ目はこいつじゃ。」

「これ蝶ネクタイ型変声機じゃねーか。」

「裏をよく見てみろい。」

「あれ、裏にスイッチが増えてるぞ。」

「そうじゃ。そのスイッチを押すと君が言った日本語が英語になるんじゃ。」

「へえ、博士にしてはやるじゃん。」

「そうじゃろ。続いて次はこいつじゃ。」

「今度は追跡眼鏡か。」

「ああ、まず追跡機能の方じゃが、この発信機は半径五十メートルまでの位置がわかるようになった。さらに一つ機能を追加した。それはこいつとのコンビで動く。」

「イヤリング型携帯電話。こいつと？」

「そう、こいつにはCTUが使っている端末機能が付いた。」

「端末機能？」

「ああ、まずここについているこのケーブルをここに接続させる。そしてアクセスコードを入力する。するとレンズの片側に送られてきた情報や画像を確認できるんじゃない。」

「す、すげー。博士、頭大丈夫か？」

「わしは大丈夫じゃ。さて次に行くぞ。お次はこいつじゃ。」

「腕時計型麻醉銃か。」

「こいつは今まで一日一発だったのが三発になったぞい。」

「これでこいつの弱点も解決だな。」

「そうじゃのう、お次はこいつじゃ。」

「どこでもボール射出ベルトか。」

「ああ、こいつも大幅にパワーアップしたぞい。まずはロックオン機能じゃ。これはボールが向かっている方向で一番近い人間を感知して、そやつに向かっていく。二つ目はボールが膨らむ前の状態が小さくなって、中に入れられる数が三つに増えたぞい。さらにボールの持続時間が一分に伸びたぞい。」

「おお、やっぱり今日の博士は違うぜ。」

「そうじゃろ、お次はこいつじゃ。」

「ターボエンジン付きスケボーか。」

「そうじゃ。こいつはソーラーパワーのほかにバッテリーを搭載した。これで夜でも二時間走れるぞい。」

「すげーな、博士！まだあるのか。」

「もちろん、今度は新発明じゃ。」

「と、言うこと？」

「こいつじゃ。なずけて、ブレザー型ピリピリチヨッキじゃ。」

「ピリピリチヨッキ？」

「そうじゃ、こいつは一センチ前からピストルで撃たれてもなんら問題のない防御力と、これに触った人を瞬時に感電させて気絶させる攻撃力を備えてるんじゃ。」

「何っていつか、マジで博士が作ったのか？」

「もちろん。ホレ、哀君にもあるぞい。哀君のは白衣型と、上着型の二種類じゃ。」

「あら、珍しいわね。」

「まだあるのか？」

「これが最後じゃ。ペン型ピッキングセットじゃ。こいつを使えばどんなドアも五秒で開けられる。さらにこのペンの先は監視カメラになっていて、端末と同じように確認できる。」

「博士、これ大量に作れば金持ちだぜ。」

「そうじゃろ。やっぱりわしは天才なんじゃ。かーかっかかか。」

（中身はかわってねーな）

かくして阿笠博士の新作発表会は終りを告げた。

第十六話

「ピーンポーン。」

阿笠邸のインターホーンが鳴った。

「おっ、アイツにしてはタイミングがいいな。」

どうやら昨日コナンが言った客が来たらしい。

「よう。」

「何や、せっかく来てやったちゅうのにその態度はないやんけ。」

聞きなれた関西弁、色黒な肌、それは服部平次だった。

「しかし何で新一は服部君を呼んだんじゃ？」

「パーティーの時間かれたことを話すためだ。」

「聞かれたこと？」

「ああ、どうしてホテルの従業員がみんな片耳にイヤホンを入れてたかってことさ。」

「そんであまり話にくい事情やと思ったからここに来たんや。」

「なるほど。確かにそれは言にくいわね。」

「ほ、ほんなら、姉ちゃんも・・・」

「ええ、知っていたわ。私たちが狙われていたんだから。」

「ね、狙われとったやと！まさか工藤、まさかお前、危険になることを承知であのパーティーやつとたんとちゃうやろな。」

「その通りだ。あれは俺とCTUが組んだ作戦だ。」

「さ、作戦やと！！何で俺にも話してくれへんかったんや？」

「わりーな、服部。オメーを巻き込むたくなくて。」

「アホ、あのパーティー来とつたら十分巻き込まれてるわ。」

「そうだな。でもLAからの情報がなければ、こんな作戦はできなかったからな。」

「何で、情報がLAから来るんや？」

「そこに組織のボスがいる。」

「な。何やて。」

「そして、俺たちはそのボスの側近のNOCからの情報を得て作戦を立てた。その結果犠牲者が出なくて済んだんだ。」

「てことは組織はあの爆発以外にも何か仕掛けておったちゆうわけか。」

「ああ、毒ガスをな。」

「ど、毒ガスやて。」

「日本支部最大の武器の毒ガスで、吸えば一分で即死だ。」

「そんなもんまで使ってきたんか。」

「でも、それが不発に終わった今、奴らも日本では行動できないはずさ。奴らは日本にNOCがいると見ているらしいからな。武器がない自分たちが作戦を起こしても、NOCにはらされCTUにお縄にされちまうからな。」

「そうか。で、二人はアメリカでどうするんや?」

「一応ロスの学校に転校することになってるけど、学校が始まるのは九月から。それまでは向こうの家でゆっくりしてるぞ。」

「どうだか?」

「何だよ、オメー。」

「だって、あなたと一緒にゆっくりできたことなんて一度もないわ。」

「ホンマ、こいつ事件を呼びおるからな。」

「ほっとけ。」

「とにかく必ず生きて帰ってこいよ。この前行き損ねてもうたつま

い好み焼屋連れて行つたるさかい。姉ちゃんも来るかいな？」

「こいつはいいよ。あの時何も食べられなかったのは俺だけだから。」

「じゃあ、私も御馳走になろうかしら。この人とは別のときに。」

「一緒に来た方がええと思うんやけどなあ？」

「とにかく、この話は生きて帰ってきたらな。」

「おう。ほな、気つけえや。」

服部は阿笠邸を後にした。

第十七話（前書き）

御無沙汰してます。久しぶりに投稿します。

第十七話

服部を見送った後の阿笠邸は沈黙していた。灰原が気を使って入れたコーヒーを飲みながらコナンが口を開いた。

「今までありがとな、博士。」

「どうしたんじゃ、新一。」

「私からも言うわ。ありがとう、博士。」

「博士は正体をバラさずどんな無茶にも協力してくれた。それにメカもたくさん作ってくれた。博士がいたから今があると思ってるぜ。ほんとにありがとな。」

「ああ、アメリカでも頑張るんじゃぞ。」

「ところで博士はどうするの？この家に一人は広すぎるんじゃない？」

「大丈夫じゃ。」

「何でだよ？」

「夜になればわかるぞい。」

二人は頭の中に疑問を抱えた。次第に日が暮れ灰原が夕食の準備を始める。コナンは推理小説に読みふけており、時の移りなど気にも留めなかった。博士は用事だと言って出かけている。

「工藤君、準備手伝ってくれないかしら？」

「……」

「あなた聞ってるの!？」

「……」

「しょうがないわね。」

そう言っただけで灰原はキッチンを後にしてコナンがいるソファに向かった。目の前に立ってもまだ気がつかないコナンの本を取り上げた。「もう、さっきから何回呼んだと思ってるの?」

「わりー。で、何かよつか?」

「夕食の準備を手伝ってって言ったのよ。」

「わあ。あった。」

コナンは重い腰を上げた。ちょうど博士も帰って来たので夕食となった。

「で、博士はこれからどうすんだ?」

「この人と一緒に住もうと思っくんじゃが。」

そう言って指差した先には、博士の初恋の人でありフサエブランドオーナーの木之下フサエの姿があった。

「久しぶりですね。」

「こんばんわ、フサエさん。」

それからフサエさんを含めた四人は和やかなムードに包まれた。ただ灰原が博士の健康を考えた食事を作つてと頼んだ時の博士の顔は辛そうだった。コナンは博士の冷やかした。

「じゃあ、明日は早いから、俺と灰原は寝っから。」

「お休み、博士、フサエさん。」

コナンは二階の客間に、灰原は寝室へと向かった。

―翌朝―

コナンたちは七時半の便でロサンゼルスへと向かう。二人はビートルに荷物を載せ、成田空港へと向かった。

「いよいよだな。」

成田空港に着き搭乗ゲートに向かうコナンがつぶやいた。

「ええ。」

灰原もつぶやいた。小学生とは思えない強い目した少年と少女を、空港にいた人々に見ている。搭乗口にさしかかった時、聞きなれた声があった。

「みんな、よく来てくれたな。」

「蘭さんが昨日博士に聞いて、みんなで来たんだよ。」

「向こうに行っても頑張ってくださいね。」

「うまいいな重の店あったら教えるよ。」

少年探偵団の仲間達。

「気いつけるや。」

「また大阪きてーな。」

服部と和葉達から。

「コナン、両親の言うことをちゃんと聞くんだぞ。」

「じゃあね、コナン君。また会おう。」

小五郎と蘭からの暖かい言葉を受けながら、来てくれた人全員に手を振った。そしてジャックが駆け付け、彼らの姿は搭乗口の中に消えていった。

「寂しくないか？」

「それは、寂しいわよ。だけどこれは私たちの問題。みんなに迷惑をかけられない。」

「ああ、必ずぶっ潰してやるぜ。」

コナン、灰原、ジャックを乗せた飛行機はロサンゼルスに向けて大空に駆け上がった。

（第一部完）

第二部 第一話（前書き）

いよいよL A編に入ります。一応地名は実際のものを使いますが、住所などは架空のものを使うのでよろしくお願ひします。

第二部 第一話

雲の上を悠々と飛んでいる一機のジャンボジェット。その中にいる連邦捜査官一人と少年と少女。彼らは他人には言えない大きな使命があつた。奴らを潰すという大きな使命。

「君たちと会うことは運命で決まっていたのかも知れないな。」

ジャックがつぶやく。

「そうだね。僕がこの体になってコナンと名乗ってから新しい生活が始まつた。組織を追つて命をも落としかけたこともあつた。でも工藤新一を待つてる人、江戸川コナンを信じてくれる人のために俺はこの戦いで奴らを倒す。」

「長い戦いになるだろう。しかし彼らは必ず倒す。アメリカの国益、自由、安全を保つために。」

「僕たちは運命共同体だね。」

「君たちをこの戦いに巻き込んでしまったことを……本当にすまないと思う。」

「それはこっちのセリフだよ。」

「どうでもいいけど静かにしてくれないかしら？今いいところなんだから。」

灰原が二人に水を差した。彼女は洋画を見ていた。切ない恋愛もの

だった。

「わリーな。」

コナンは謝罪した。その後はそれぞれの時間が流れて行った。気がついたころには到着十分前だった。

「そろそろ準備するか。」

コナンは身の回りを整理し始めた。雲の間を抜けると窓の外には、真っ暗な空間の下に、おびただしい数の明かりが輝いていた。

「到着は零時三十分だ。君たちは仲間が回してくれた車で工藤邸へ送る。」

ジャックが言った。

「わかったわ。」

灰原が答える。

大きな翼を広げた鉄の鳥がゆっくりと羽根を休めるために地上に降下していく。それは新たな戦いの始まりのゴングなのかもしれない。

LAの地に降り立った三人。到着ロビーに入ると一人の紳士と二人のキャリアウーマンらしき女が彼らを待っていた。

「ジャック。」

ストレートの髪の女がジャックに近づく。

「久しぶりだなクロエ、どんな風の吹きまわしだ？」

ジャックは三人に挨拶をすませると二人のことを説明し始めた。

「この二人が組織の被害者で、今回捜査協力してくれるシンイチ・クドウとシホ・ミヤノだ。」

「本当に見た目は小学生ね。」

驚いた表情をするクロエだが、ほかの2人は意外と冷静だ。ジャックは次に二人に説明を始めた。

「彼女はクロエ・オブライエン。レベル6の分析官で俺が信頼する仲間の一人だ。データ関係なら彼女が一番だろう。その隣の彼女はミシエル・デスラー。彼女はLA支部のチーフだ。そして残りの彼がビル・ブキャナンド。彼は現場部門のチーフで作戦の第一線で指揮を執る。」

「よろしく。」

「こちらこそ。」

笑顔で握手を交わす。その後LA支部のメンバーは職場へと戻って行った。ジャックたち一行は、ビバリーヒルズにある工藤邸に向かった。

夜の街を駆け抜けるグレーの車。フリーウェイはさすがにこの時間だとガラガラだ。あっという間にLAの街並みが車窓から離れていく。しばらくしてビバリーヒルズに入った。どちらを見ても豪邸

しかない。その豪邸の中に工藤邸の明かりが見えてきた。

ジャックが呼び鈴を鳴らすと、有希子が出てきた。

「新ちゃん、久しぶりね。それに哀ちゃんも。」

「たく、挨拶する暇があったら荷物運ぶの手伝えよな。」

「あら、レディにそんなこと言うのね。」

「手伝えば痩せれるぞ。」

「失礼ね、新ちゃん。」

その後も冗談を言いながらコナンは荷物を家の中に入れ始めた。

「さて、片づけは明日にして、もう寝ようぜ。」

「そうね、日本出たのが早かったせい結構眠いわね。」

「じゃあ、そういって。」

二人は工藤夫妻が用意した部屋に向かい、夢の世界へと旅立っていった。

第二話

翌日、LAは見事な青空が包みこんでいる。

「新ちゃん、早く起きなさい。」

有希子の声が響く。すると自室にこもっていた優作が

「有希子、もう少し静かにしてくれないか？」

と言い、軽い言い争いが始まったが、コナンが出てくる気配はない。有希子は仕方なしに灰原を呼び彼を起こすことにした。

「しょうがないわね。」

灰原も不機嫌そうな顔をしながらコナンの部屋に向かう。

「工藤君、あなたいつまで寝るつもりなの？」

ドアを開けた灰原が頭ごなしに一喝。ところがコナンの反応は鈍い。

「うつせえな、もうちょっと寝させるよ。」

呆れた灰原は最終兵器を使うことにした。

「バカ！やめろ！」

コナンが驚いた。灰原が自分の腕をつかみ、胸にあてようとしているのだから。

「妙なことをしたら抹殺よ!!! ￥￥￥」

灰原に抵抗できずついにコナンの手が灰原のボディに触れる。しかしその瞬間。

「痛つてえー!!」

コナンの指に高電圧の電流が流れた。さすがのコナンの眠気も覚めたようだ。

「あら、新ちゃん。哀ちゃんにやられたのね。」

有希子が部屋に入って来た。

「これが毎日続くと思うと気が重くなるわね。」

その後朝食を食べた二人は荷物の整理を始めた。

「えっと、これはこっちでこれは・・・」

コナンは次々と運んでいく。一方の哀は、もう終わっておりパソコンのデータの確認を行った。しばらくしてコナンの部屋片づけがひと段落した頃、ジャックがやって来た。

「どうやら、片づけは終わったようだな。」

「ああ、お陰さまで。」

「ところで、今からドライブでもしないか？戦場を下見しないと行

けないからな。」

「そうだな。じゃあ、お願いしよう。」

コナンはジャックの車に乗った。その頃工藤邸では……

「あら、新ちゃんは？」

「さつき、ジャックが来て下見に行っただわ。」

「そう。」

灰原と有希子はリビングのテーブルに向かい合って座っていた。

「哀ちゃん、新ちゃんのことどう思ってるの？」

(何を言い出すの？この人。)

「私の勘だと哀ちゃんは新ちゃんのこと気になってるでしょう？」

図星だった。三年間自分の心の奥でひた隠しにしていた一番強い気持ち。それがコナンへの思いだった。

「気になってるどころじゃありません。」

「そう、でも哀ちゃんは蘭ちゃんのことを気にしてるのね。」

「はい、私のせいで彼の人生や彼女とのかけがえのない時間まで奪ってしまった。こんな私を彼が受け入れてくれるわけがない。」

これが彼女の本心。たとえ彼が許しても自分の思いを伝えるべきではない。決して叶わぬ恋。それが自分への抑止力として働いていた。

「そう、でもつらいんじゃない？」

「いえ、これは私に与えられた使命。そして彼の幸せを願うものとしてやらねばならないこと。」

「そう。」

有希子が悲しそうな瞳をしながら彼女を見つめる。静かに時が流れていった。

第三話

「でも哀ちゃん。どうしてそんなに自分を苦しめるの？」

「それは私の運命。どうにもすることはできないんです。」

辛い思いを抱えていた灰原に有希子が語った。

「確かにあなたは新一を小さくした薬を作った。そしてその薬のせいでかけがえのない命を奪った。そのことは償わねばならないことでもだからと言って新一と一緒にになっていちゃダメだとは思わないわ。それは、薬によって人生が壊れてしまった人も望んではいない。あなたは悪いわけじゃないのよ。むしろ私は哀ちゃんに感謝してるのよ。」

「何で私なんか？」

「まず薬を飲まされる羽目になったのはあの子がしゃばりすぎたから。でもあなたの薬があったから彼らは拳銃を使わなかった。この時点であなは新一の命の恩人なのよ。そしてあなたは新一が元に戻るために毎晩のようにパソコンをいじっていた。私たちには感謝しかないのよ。」

「でも……」

「哀ちゃん。今すぐには言わないけど、自分に素直になってね。新一だって哀ちゃんのこと意識してるみたいだから。」

「わかりました。これはしばらく秘密にしてください。」

「しばらくどこに居るじゃないかもよ。あの子相当鈍感だから。」

「そうですね。」

灰原はクスツと笑った。有希子はそんな灰原を見ながら思った。

（新ちゃんはどうするのかしら？）

「一方その頃」

「で、ジャック。どこに行くつもりなの？」

「CTUだ。ちょっと彼女に渡したいものがあったね。君をパーマ
ー大統領に会わせたかったしな。」

「そうか。」

「ではクロエに頼んで電話会議をさせるように手配させる。」

ジャックは携帯を取り出しクロエに電話をかけた。

「オブライエン。」

「クロエ、俺だ。」

「ジャック。」

「パーマー大統領と話がしたい。つないでくれ。」

「了解。……どうぞ。」

「ジャック。」

「大統領。今からお時間は大丈夫でしょうか？」

「ああ、大丈夫だ。」

「わかりました。今隣には協力者の工藤新一がいます。」

「彼が。」

「それで、CTUに着いたら電話会談をしたいのですが。」

「いいだろう。後どれくらいで着く？」

「約十分です。」

「わかった。すぐに支度に入る。」

「了解しました。」

「CTUで準備が進んでいる。ついでにメンバーも紹介しよう。」

「ありがとうございます。」

車はLAの街を駆け抜けていく。ジャックの腕で周りの車を置いていく。

第三話（後書き）

しばらくペースが遅くなりそうです。LAの対決の内容はほとんど決まっているのですが

その前の些細なことがなかなか思いつきません。あやふやになるかも知れませんがよろしくお願いします。

第四話

「着いたぞ。」

車から降りた一人の少年と一人の男。

「ミシエル。」

「ジャック、こつちよ。」

そう言つて彼女は彼らを会議室へと連れて行つた。その会議室には大型画面があり、非常事態のときには大統領からの指示を直接受けることができるようになっていた。

「ここからはクロエの仕事よ。」

すると見たことのある女性がやって来た。空港に来ていたCTUのクロエ・オブライエンだった。

「つながります。」

すると彼女はキーボードを異常な早さで打ち始めた。コナンは灰原がデータを見ていた時の動きを見てきたが、そんな彼であっても圧倒されるスピードと正確性だった。

「ジャック。」

画面がつながった。どうやらパーマー元大統領はホワイトハウスにいるようだった。

「大統領。早速はじめましょう。」

コナンが画面の正面の席に座った。

「はじめまして。シンイチ・クドウ。あなたのお父上の小説はいつも楽しく読ませてもらっているよ。」

「こちらこそ。ミスターパーマー。ところであなたの隣の人は？」

「ああ、こいつは私の弟のウェイン・パーマーだ。私の秘書をやっている。」

「よろしく。」

「ああ。」

その後コナンは日本での戦いのお話や、コナンになった頃の気持ちなどを話した。

「さすが私たちが一目を置いているだけのことはあるな。」

今度はデイビットが主導権を握って話し始めた。

「さて、そろそろ組織のLA支部のことを話す時間のようだ。彼らのコードネームはスピリタス、ロリンコ、ノイリー、スーバス、ハイボールだ。このうちハイボールとロンリコは我々の仲間だ。」

「二人もNOCはいるんですか?!?!？」

「ああ、彼らはもともと国防総省とCIAという別々の国家組織のメンバーだったが、今回C T U t y p e - B ができて仲間となったんだ。ハイボールは組織一の狙撃手といわれていて君が日本で戦ったキャンティ、コルンは彼の一番弟子だ。ノイリーは最初研究施設に潜ったがある理由でスピリタスの目にとまり、一番の側近となった。」

「じゃあ、ホテル事件の時の情報は彼から。」

「そうだ。そしてジャックや君たちがうまく行動してくれたおかげで、日本支部はしばらくは行動できないだろう。万が一に備えて赤井君もいるので安心してこっちで戦ってほしい。」

「ありがとう。」

その後は今後のことなどを話した。

「デイビット。そろそろ大統領とのお約束が。」

「わかった。ではまた会おう。」

「はい。」

そう言って約一時間に及んだ会談は終わった。

「あなたなかなか肝が据わっているわね。」

「どうしたの？クロエさん？」

「彼とあんな風にしゃべれるのはジャックぐらいよ。」

「そうなんだ。でもそれぐらいじゃなきゃ今生きていないよ。」

「フツ。面白いわね。」

「シンイチ。例の物が手に入った。」

「そうか、じゃあ帰ろうか。」

「待って、あの子に伝えてね。待ってるって。」

「ああ。」

コナンはCTUを後にした。

第五話

「哀ちゃん、ちょっといいかしら?」

有希子が哀を訪ねた。

「はい?」

「ちょっとみて、新ちゃんの部屋。」

灰原はコナンの部屋へ向かった。凄まじい散らかりようだった。

「片づけましょう?」

「そうね。」

二人はコナンの部屋を片づけを始めた。

「しかし新一はこんなんでもよく今まで生きてこれたわね。」

「何でも蘭さんが掃除に来てくれていたようですよ。」

「何ですって!! 新一!!!」(怒)「よくもあんないい子を!!!」(怒)「帰ってきたら・・・」

有希子の怒りはとどまるところを知らなかった。しかし哀の説得でコナンが帰ってくるまでは耐えられそうだった。

「ただいま。」

「新ちゃん。あなた日本で誰の世話になっていたの!？」

「やっべ。」

「やっべじゃないわよ。こつてり教えてあげるわ。女心をね。」

その後コナンは有希子に長々と説教されたのは言うまでもない。

有希子の怒りが収まったのはもう日が暮れたころだった。

「じゃあ、ちょっと外に行ってくるわ。」

「もうすぐ夕食だから早めに戻ってくるのよ。」

「へいへい。」

コナンは庭の方へ向かった。その目線の先には、星を眺める一人の少女。

「あら、明日は雨かしら？」

「はあ、なんでだよ。」

「別に、大した意味はないわ。」

「オメーに渡すもんがあんだけだよ。」

「あら、楽しみね。どこかの道楽息子さんはどういうセンスしているのかじっくり見せてもらおうわ。」

「バーロ。んなもんじゃねーよ。」

「じゃあ何なのよ？」

「こいつね。」

コナンはポケットに手を入れた。出てきたのは一枚のカードだった。

「これは？」

「CTUの全機密情報を見ることができるアクセスカードだ。」

「どうして私なんか？」

「クロエさんがな、オメーには私の隣で俺やジャックのサポートしてほしいんだそうだ。」

「そう。」

「でも、これだけはわからないんだよ。」

「あら、どんな謎なのかしら？」

「ジャックがさ、どうしても俺から渡してくれって聞かなかつたんだ。」

「そう。」

「どうしてだろうな？」

「さあ。私には……でも、」

「でもって、当てがあるのか？」

「彼が、あなたから受け取ったほづが喜ぶと思ったんじゃないかしら。」

「はあ、なんでだよ？」

「あなたに興味があるから。」

「えっ。」

「なんてね。」

「新ちゃん、哀ちゃん、ごはんできたわよ。」

「さあ、行きましょつ。」

（本当に鈍感ね。私たちずっとこのままなのかしら？）

彼女の思いが空に乗り移ったかのように、夜は更けていく。

第五話（後書き）

初めて「なんてね。」を使いました。これからもがんばっていきます。そろそろオリキャラ収穫祭が始まると思いますが、よろぴくお願いします。

第六話（前書き）

お久しぶりです。このあとテストや修学旅行の準備やらで忙しいので更新のペースが落ちるかもしれませんがよろしくお願いいたします。

第六話

「ねえ、あなたいつまでダラダラしてるつもりなの？」

灰原が毎日のように推理小説を読んでいるコナンに言った。組織の支部、それもボスのいるところであまりにも気が抜けているコナンに灰原は少々呆れていた。

「うっせーな。まだCTUから何も連絡が入ってないから大丈夫だってーの。」

「だといけど。」

「そう言えば父さんと、母さんは？」

「優作さんの次回作の取材のために今朝、二人でフランスに向かったわ。」

「ああ、そういやーんなこと言ってたな。」

「だから、しばらく二人きりね。」

「だな。」

ロサンゼルスにきてもうすでに一週間が経過した。相変わらず組織の気配は音沙汰ない。それどころかこのビバリーヒルズの周りはかなり静かであった。

「なあ、ちょっと図書館にいかなねーか？」

「どござって？」

「いや、ちょっとここにある推理小説、昨日で読み切っちゃってよ。だからあつちに行けば何かほかに読んでないやつがあるかも知れないだろ。」

「まあ、たまにはいいわね。」

「じゃあ、支度していくか。」

「そうね。」

二人は身支度を整えるために一度部屋に戻った。先に準備が終わったのはコナンだった。続いて灰原も二階の部屋から降りてくる。

「何だ、オメーにしては遅かったじゃねーか。」

「悪かったわね。独和辞典の入っている辞書がなかなか見つからなかったのよ。」

医学では英語とともにドイツ語もよく使われている。カルテは基本ドイツ語で書くという医師もなかなか多いらしい。もちろん灰原がそれを使うのもごくほんとにたまにだ。

「じゃあ、行くか。」

「ええ、行きましょう。」

戸締りをしてコナンたちが工藤邸の敷地を出た時、向かいの側を歩

いている自分たちと同じ年ぐらいの少年がいた。向こうから挨拶をされたのでこっちも挨拶をすると彼はコナンたちに近づいた。

「やあ、僕はジェイク・ロドリゲス。あの家の使用人の息子だ。」

ジェイクは工藤邸のほうとは反対の方向の家を指差した。

「君たちは。」

「僕はコナン・エドガワ。こいつはアイ・ハイバラ。俺たちはこの家に居候させてもらってるんだ。」

「よろしく、コナン、アイ。」

「ああ、「こちらこそ。」

「よろしくね。」

ジェイクはコナン、哀、それぞれと握手をした。

「そういえば君たちは何年生なの？」

「今度の九月で四年生さ。」

「へえ、じゃあ、僕と同じだね。」

その後二人は彼からいろいろなことを聞いた。

「じゃあ、学校も一緒だね。よろしく。」

「ああ。」

「「ちら」ぞ。」

「じゃあ、そろそろ戻らないといけないんだ。」

「ああ、じゃあな。」

「また。」

そう言っただけは小走りで家に戻っていった。

「へえ、なかなかの子じゃない。」

「ああ、礼儀正しいし、使用人とはいえこの辺に住んでるだけのことはあるな。」

「行きましよう?」

「ああ。」

二人は図書館へ向かった。

さすがに大きな図書館に行ったので互いにまだ読んだことのない本もあつたらしく二人は夢中になった。気がつくとも閉館時刻の二十分まえだったのでコナンは灰原に声をかけた。

「そろそろ帰らねーか?」

「そうね。でもちょっと待ってもらえるかしら?」

「わあつた。」

灰原は残りのページを恐ろしい速さで読み切った。

「おい、オメーそれでちゃんと読めたのかよ。」

帰り道、コナンが聞いた。

「ええ。まああれくらい軽い本だったらもうちょっと早く行けたかもしれないけど。」

「やっぱスゲーな。毎晩遅くまでパソコンいじってるだけのことはあるってか。」

「何よ。それ私が陰気だつて言いたいの？」

「さあ。」

「白状しないと新薬のモルモットにするわよ。」

「はい。・・・大した意味はございません。」

「そう。」

二人はこの後もいつも通りの会話をしながら帰って行った。

第七話

図書館に行った日からもう一週間近くの時が流れた。コナンたちは相変わらず平凡な日々を過ごしている。一方の工藤夫妻は、取材から帰って来たばかりだった。(今は時差ボケで二人とも爆睡中)

「たつく、一週間近く家に息子を置いて行くなんて、あの親たちはどんな神経してんだ？」

「さあ。知らないわ。」

「それにしても母さん、新しい服をいっぱい買ってきたけど、何に使うんだ？」

「私は探偵じゃないからわからないわ。」

「一応、少年探偵団の一員だっただろ？」

「そうね。でも私はパスよ。」

こんな会話が二人の起きるまで続いた。

「もうひと眠りしようかしら。」

「まだ寝るのかよ？」

「仕方ないじゃない、優作ったら飛行機の中まで編集社に追われちゃって。」

「なら明日の朝食は私が作りますから、有希子さんは寝ていてください。」

「哀ちゃん、大丈夫？」

「ええ、日本にいるときは私が博士の料理を作っていたし、この探偵さんの世話もしていたしね。」

「もう。あなたって人はまたレディーに迷惑かけたの？」

「迷惑じゃねーよ。向こうが勝手に食べなさいって行って出して来たんだから。」

「今日は何にしようかしら？有希子さん。レーズンありますか？」

「多分、あの棚の上に大量に入っている瓶があると思うわ。」

「そう、じゃあ工藤君の朝食はレーズンパンね。」

「何とかそれだけは……」

「じゃあ、……そうね……。」

「じゃあ明日哀ちゃん借りていいかしら？」

「何で俺に聞くんだよ？今とここいつとは何も関係ないんだから。」

「ええ。だから有希子さんに付き合っつてことと、工藤君の朝食とはつりあいません。」

「じゃあ、哀ちゃんの次回作のモルモットでいいんじゃない？」

「それならいいわ。」

「勝手に決めんじゃねーよ。」

「あら、一日レーズンがいいの？」

「はい、すみません。」

「じゃあそういうことで決定ね。だけど哀ちゃんは明日、あたしに付き合ってもらおうわよ。」

「わかりました。」

(意外と母さんと打ち解けてるようだな。灰原の奴。)

「ところで、新ちゃん？こいつとは今のところ何も関係ないってことは、将来はどうなの？」

「何だよ。俺と灰原がどういう関係になろうがいいじゃねーか。」

「そうね。楽しみしてるわ。新ちゃんの答えをね。」

「へいへい。」

こんな平和な日はいつまで続くのだろうか？

第八話（前書き）

この撒いた種がうまく咲きますように

第八話

「で、何の用ですか？」

「新ちゃん、ちょっと二人になっていいかしら。」

「ああ。」

コナンは部屋に戻って行った。

「実はもうちょっと先の話なんだけど、新ちゃんの誕生日祝いのホームパーティーをやるうと思ってるの。新ちゃんったらまた自分の誕生日忘れてるのよ。」

「相変わらずね。」

「でしょ！？それで明日一緒に買う方のプレゼントを選んでもらいたい。最近新ちゃんがほしいものなんてわからないから。」

「いいですよ。」

「ありがとう、哀ちゃん。」

（またパーティーか。）

「で、明日はどこに行く？」

「その前に彼へのプレゼントを考えないと\$%&」

灰原の唇が有希子の人差し指でふさがれた。

「大丈夫よ。もう大体のプレゼントは大体決まっているから。」

「えっ。」

「パリに行ってる間に考えていたのよ。もう揃ってるわ。」

と言って有希子はパリで買ってきた買い物袋の中身を見せた。

「ちょっと、これって。」

「そう、哀ちゃんはプリンセスになるのよ。この家の小さなプリンスのね。」

灰原は顔を真っ赤にした。

「何でこんなことを？」

「もちろん、哀ちゃんの思いに気付かせるためよ。」

「い、嫌です。わ、私は工藤君に思ってもらえ\$%&。」

「哀ちゃん、この前も言ったでしょ。私たちはあなたを恨んでもいないし、むしろ幸せになってほしいのよ。新ちゃんだってそう願ってるわ。」

「く、工藤君が!?!?」

「ええ。新ちゃんってたわよ。ハイツはやさしい奴だよ。だっ

て自分の欲望は顔に出さずに周りの人、大切な人のためになら平気で自分を犠牲にするやつだんだから。このやさしさは蘭のやさしさとは比べ物にならねーさ。だから俺はあいつの力になりたい。でも俺は無力だ。何にもできなかつた。どうすればアイツは幸せになれるんだろっ？って。」

「い、いつ？」

「去年の秋ごろに日本で新ちゃんに会った時よ。」

「そうですか。」

「ねっ、だから。」

「でも、恥ずかしいです。」

「・・・そうよね。でも、新ちゃんには哀ちゃん存在が大きな支えになってるわよ。じゃあ、プリンセスになつてもらうのはあなたのナイトになつた時にね。」

「はい。でもすいません。あなたの計画を・・・」

「いいのよ。これも予想済み。だからこつちにもあるのよ。」

有希子はもう一つの袋を出した。この袋は始めて見る。

「じ、これは。」

灰原は初めて有希子をすごい女性だと思った。

「これならいいでしょ。あなたたちの絆のシルシよ。」

「はい、ありがとうございます。じゃあ、哀ちゃんは何をあげるの？」

「じゃあ……。」

「わかったわ。じゃあ、明日はよろしくね。」

(工藤君、ありがとう。)

灰原はやさしい顔でコナンの部屋を見上げた。

第九話（前書き）

またまたパーティーです。

第九話

五月三日午前七時。(日本時間四日午前零時)

「いよいよ今日ね、哀ちゃん。」

「はい。。。」

今日はコナンこと、工藤新一の誕生日パーティーの日である。本当は四日であるが、日本時間に合わせようという有希子と灰原の計らいで今日となっている。

「ところで、新一は予定通り？」

「はい、ここ数日、誕生日のことなんて一言も言っていないんですけどから。」

「そう、さすが新ちゃんね。じゃあ、新ちゃんのことにはジェイクに任せて私たちは準備をしましょう。今日は優作が使えるから力仕事は任せると言っても忙しくなるわね。」

そう、優作は久しぶりの愛息の誕生日パーティーということで寝る間も惜しんで筆を動かし、驚異的なスピードで原稿を書き上げたのだ。

「おはよう。」

「あら、新ちゃん。早いのね。」

「昨日八時に寝たからな。それに八時半にジエイクと待ち合わせしてるから。」

「そう、哀ちゃん。朝食作るの手伝ってくれないかしら？」

「わかりました。」

コナンは朝食を食べ、ジエイクのいる向かいの家に向かった。

「優作！！いつまで寝てるの！！？今日は新ちゃんの誕生パーティーの手伝いをするんじゃないの！！？」

「そうだったな。」

「早く起きなさい！！！」

有希子の怒鳴り声が響く。

灰原はキッチンで食べ物用の用意、優作は部屋の飾り付け、有希子は全体の指揮と、どちらかの手伝いをしていた。

「哀ちゃん、がんばって。あと一品だから。」

パーティー用なのでかなりの量の食材を使っている。さすがに哀一人では……

「優作、あんたの方が楽なんだから早く哀ちゃんの手伝いをしてやんなさい。」

そう言っただけで有希子もキッチンに入った。二人は息の合った連携プ

レーでできばきこなししている。そこに優作が入って、テーブルの盛り付けが終わった。

「はあ、やっと終わったわね。」

「ええ。こんな事だったら工藤君に手伝わせるべきでしたね。」

「ほんと。つくづく新一も罪な男よね。こんなにかわくて健気な女の子二人から思われてるなんて。」

「それって、蘭さんと吉田さん？」

「じゃあ、三人ね。」

「もう一人は？」

「自分で考えるのね。」

(健気で工藤君を思っている女の子？私は汚れた女だから・・・誰？)

「有希子、駄目じゃないか。彼女を困らせちゃ。」

「ごめんね、哀ちゃん。今は忘れて。」

「わかりました。」

「そろそろね。」

その時灰原の携帯が鳴った。

「はい、ジェイク?」

「ああ、そうだよ。今から出ようと思うんだけど大丈夫かな?」

「こっちはオーケーよ。」

「わかった。」

「今から向かうそうです。」

「そう。新ちゃん、見てなさい。」

・その頃―

「ありがとな、ジェイク。お陰でケツコー楽しめたよ。」

「どういたしまして。」

「オメー昼はどーすんだ?」

「君の家のお母さんがこっちで食べなさいって。みんなの許可はもらってあるからそっちで一緒に食べるよ。」

「そうか。」

そうこうしてるうちに工藤邸の玄関ドアの前に着いた。コナンはドアを握った。

第十話

ジェイクとの約束を済ませたコナンが工藤邸の玄関ドアを握っていた。その頃ジェイクはズボンの後ろのポケットから取り出し、コナンがドアを開けるのを今か今かと待ち構えていた。

コナンがドアを開けたその時、

「HAPPY BIRTHDAY CONAN!!」

あっけにとられているコナン。この状況を理解しようにも頭が真っ白になっていて持ち前の探偵スキルが全く働いていない。

「あら、哀ちゃんの言う通りね。」

「ほんとにあなたと会ってからまともに誕生日を覚えていたことなんてないわね。去年何かは、事件だとか言って博士たちが準備していたパーティーすっぱかしてましたから。」

未だ茫然と立ち尽くしているコナン。その周りを全員の笑い顔で囲まれている。

「さあ、哀ちゃんの作ったお料理が冷めなうちに食べなきゃね。さあみんなこっちにいらっしやい!!」

相変わらずの有希子であった。

「まったく、一言ぐらい言ってくれよな。」

不機嫌そうなコナン。

「大体誕生日を忘れているお前が悪い。」

的確な反論をした優作にコナンは何一つ言葉を発せられなかった。

「さてと、そろそろいい頃合いね。」

と言って有希子はリビングを後にした。

「さあ、あなたの元女優のあの人がどんなプレゼントを出してくれるか楽しみね。」

「別に、二十一になって”#\$%&”

「ふふ。」

「お待たせー。コナンちゃんへのプレゼントよ。」

すると有希子は全員に帽子を配った。男女に色の差はあるがデザインはカジュアル系のおそろいのもだった。

「これは私たちがお互いに抱いている愛情、友情、信頼、の証よ。」

「証……。」

「そう、どんなに苦しくても頭の上にあるこの帽子を持っている人の気持ちを忘れないようにね。」

「ありがとな。母さん、じゃなくて・・・」

「いいのよ、母さんで。もうあなたたち二人は私たちの子供同然よ。」

「わあったよ。母さん。」

「ええ、ありがとう、コナンちゃん。」

「ところで、工藤さん。」

ジエイクが口を開いた。

「有希子さんでいいわよ。」

「はい。僕までこれをもらってもいいんですか？」

「当然よ。あなたはコナンちゃんがこっちに来て一番最初のお友達だから。仲良くしてあげてね。」

「はい。ありがとうございます。」

「じゃあ、みんなで写真撮りましょう！！。みんな並んで、並んで！！」

「ったく、しょうがねーな。」

「あなたのお隣かしら。」

「そう見てーだな。」

「じゃあ、失礼。」

「タイマー押したわよ!!」

「はあ。」

「あら、浮かない顔ね。」

「だりーんだよ。」

「じゃあ、いつかの金田一君みたいに……」

「わあつたよ、笑えばいいんだろ。」

カシヤア!!フラッシュがたかれた。

「うん。よく撮れてる。」

これでコナンのサプライズバースデーパーティーは終りを告げた。

第十話（後書き）

灰原のいつかの金田一君のようには、DSのふめぐり合う二人の名探偵のラストシーンからです。

第十一話

あの誕生パーティーからしばらくの時間が過ぎた。コナンは相変わらず推理小説を読んだり、庭でリフティングをしたりとマイペースな生活を送っていた。

「ちょっと、出かけて来るな。」

コナンが灰原に向かって言った。

「あら、今日は彼なしなのね。」

そう。最近コナンが出かけるときはいつもジエイクと一緒になのだ。

「ああ、ちょっと気晴らしに公園にな。じゃあ、母さんにはうまく言っておいてくれ。」

「はいはい。」

そう言っただけでコナンは出て行った。ちなみに優作は出版社の集まり、有希子は買い物で家を空けていた。灰原は有希子が作った研究室に向かった。

(何とかしなきゃね。蘭さんに寂しい思いをさせて、私だけいい思いをしているのだから。)

コナンは公園に着いた。広い公園の中にある大きな壁の前に立った。昼下がりの日光を背にコナンはボールをけり出した。まるで本

物の小学四年生のように。

「ただいま。あら、哀ちゃん。新ちゃんは？」

有希子が灰原に声をかけた。

「さあ、公園に行くとは言ってましたけど……。」

「そう、さて、夕食の用意をしないと。」

「はい。」

いま工藤邸の夕食は有希子と灰原の二人が用意している。これほどの家に住んでいるのに使用人がいないことを灰原は不思議がっていたが、その理由が今日明らかになった。それは有希子の愛車であるジャガーのチューニングや維持費に莫大な費用がかかっているからだ。さらに手間と時間もかかっている。

（ここまでしてこの車にこだわりがあるのね。）

と灰原は心の中で冷やかした。と、同時に同じように車にこだわりを持っている組織のメンバージンのことを思い出した。ただジンは今日本にいないため、かつてのような怖がる仕草は出なかった。

「哀ちゃん、ごめん、そのこの棚の中から、小麦粉取ってくれないかしら。」

フライパンに有希子はバターを溶かしている。どうやらホワイトソースを作っているようだ。

「はい、有希子さん。」

灰原が有希子に小麦粉の入った袋を手渡した。

「ありがとう。ほんとに哀ちゃんがいてくれると助かるわ。家の男どもは包丁すらまともに使えないから。」

「いえ、でも彼らの料理の腕がなかなか上がらないのも大きな謎ですね。」

「ほんと。」

その後もてきぱきとキッチンを作業をするふたり。

「そう言えば、新ちゃん遅いわね。哀ちゃん、もう一人で大丈夫だから新ちゃんを呼んできてきくれない？」

「わかりました。」

灰原は身支度をし、薄暗い玄関ドアの外の領域に足を踏み出して行った。

第十一話（後書き）

これから受験体制に入るので、少し更新が遅くなります。

第十二話

灰原は走った。息を切らしながら懸命に。自分の身を守るため。そして何より彼女にとって一番大切な人のために。

（まさか彼らに居場所を知られたのでは？）

と灰原は考え、もう体力的には限界を超えていたが彼のことを心配する気力が先に足を動かしていた。

しばらくして灰原は公園に着いた。そして公園に入るなり彼の名を呼んだ。

「工藤君！！工藤君！！」

いくら呼んでも返事が返ってこないことに灰原は焦った。そして組織への恐怖心が込み上げてきた。しかし、灰原はなおも呼び続ける。しばらくしてコナンがボールを当てていたと思われる壁の前に来た。壁の後ろには彼が蹴っていついたと思われる跡もあった。その近くに引きずったような足跡が続いている。

（まさか、本当に彼らに。いや、彼らならあんな後は消すはず。ましてやこの時間にならないとこの公園は人通りが少なくなならない。じゃあ、彼はまだこの公園の中のはず。）

この状況から達した考察に基づいて灰原はコナンを搜索を再開した。

そして芝生で寝転んでいるコナンを見つけた。

「あなた、こんな時間まで何やってるの!？」

「何だ、灰原か。」

「何だじゃないわよ。どれだけ心配したと思ってるの!彼らにさらわれたかとおもったじゃない!！」

「わりーな。携帯は電池切れで、おまけにちよつとやりすぎちまってもう体が動かなくなっちまったんだ。」

「そう。じゃあ、帰るわよ。」

灰原は有希子を心配させまいと早く帰るようにコナンを促した。しかし当の本人は

「待てよ。オメー汗だくじゃなーか。ちよつと休んで行こうぜ。」

結局灰原はコナンの言ったことにのつた。実際灰原の体力も限界を超えていて、コナンを見つけた瞬間から疲れを忘れさせていた張りつめていた緊張感が切れてしまっていた。灰原はしぶしぶコナンの隣に寝転がった。

「なあ、俺たち、初めて会ってからもう三年だな。」

「そつね。」

満点の星空の下、彼らの話は雲のように弾んでいく。

「最初、オメーには面食らったぜ。いきなり黒ずくめの奴らの仲間
で阿笠博士の家に住んでるなんて言い出すんだから。」

「あら、そんな現実味のない私の皮肉った言葉と、組織の気配を醸し出した私の演技に引っかけた間抜けな探偵さんにもシヨックを受けたわ。これじゃあジンに小さくされたのも頷けるわ。」

「おいおい。仮にも二度命を助けた奴に言う言葉か？」

「あら、私も何度かあなたのことを助けた記憶があるんだけど？」

「そうだったな、」

第十二話（後書き）

明日から修学旅行で海外に行ってきます。

なので一週間は更新できません。ごめんなさい。次回もお楽しみに。

第十三話（前書き）

みなさん、お久しぶりです。いやあ、オーストラリア・ケアンズに四泊六日の修学旅行はとても面白かったです。とにかく自然が壮大さを肌を感じてきました。僕の文もあれくらい広いものがかけたらなあと思鬱になっています。

第十三話

「最初、オメーにはひでーこと言っちゃったよな。オメーは何も悪くないのに……。」

「言われて当然よ。結局あの頃はあなたたちから憎まれ、組織からは必要に追われていると思っただわ。でも杯戸シティホテルの一件の時や、バスジャックの時の自分のことを省みずに私を助けに来てくれたあなたを見て、この人なら信用できると思った。」

「それはこつちもさ。オメーがいなかったら今頃組織に殺されているだろうな。事件に没頭しすぎて熱くなっていた時に水を差してくれたり、俺の手伝いをしてくれたり、俺にとっては蘭以上に大切な存在かも知れない。」

「それは自分の身を守るためにやっていること。だから本当に私は嫌な女だわ。あのエンジエルのような蘭さんの方がいい人だわ。だから、私はあなたにとっての一番にはなれないの。」

「バー口。それはオメーが決めるんじゃないよ。俺が決めるんだ。」

「フフ。相変わらずに気障なのね。」

「でもオメーが今の俺にとって大切な存在であることは間違いない。だって江戸川コナンが生まれたのは、オメーのおかげなんだから。」

「だからと言ってすべてが結果オーライとはいかないわ。事実あの薬で空の上でしか生きられなくなった人たちがいるのだから。」

「ああ。それは償わなきゃならねーことだ。だからといってオメーという人間性を否定することはできないぜ。もし、オメーがその重荷に耐えきれなかつたら俺も一緒にそれを背負ってやる。オメーと同じことを経験した俺なら、きつとオメーのことを支えてやれるから。」

(やっぱりあの時この人を頼ってよかった。)

「フフ。最初にあなたに言ってキレられた言葉と一緒にね。」

「そうだな。」

「頼りにしてるわよ。探偵さん。守ってくれるんでしょ？」

「ああ。死んでも守りきってやる。」

「ありがとう。」

彼らにはとても強い絆が生まれていた。それは新一のころにはあまり感じないことだった。サッカー部で全国大会を目指していたころにはそのようなこともあったが、パートナーとして、ともに信頼できる相棒としてのかけがいのものはコナンにとってはじめてのかんじようだった。

「さあ、そろそろ帰りましょう。もう歩けるわよね？」

「ああ、もう大丈夫だ。ありがとうな。」

コナンはサッカーボールを足に吸いつかせ、自分の周りを自由自在に浮かせながら歩き始めた。灰原はそれを隣でやさしく見守ってい

た。互いの心の距離が縮まったせか、いつもよりも二人の距離が遠く感じられた。

第十三話（後書き）

書き方を変えて見ました。これからはこの書き方で行きたいと思
います。

第十四話（前書き）

お久しぶりです。

第十四話

「おいおい、大丈夫かよ……。」

「ごめんなさい。迷惑かけるような真似をして。」

灰原が倒れたのだ。理由は過労と寝不足だった。

「何でこんなになるまで……。」

「私は、私の責任を果たすために……。」

長い沈黙。

- 数時間前 -

「おい、オメー大丈夫か？」

「ええ、寝不足はいつものことでしょ？」

いつものような愛想のない言い方だったが、コナンには一目でわかった。灰原が無理をしていることが。

「まあ、いいや。で、今日オメーはどうするんだ？っておい灰原！
！灰原！！！！！」

- 現在 -

「オメーの責任……。」

「そう、私が組織にいた頃にしてしまった過ちを償うため。そして、自分自身へのけじめのために。」

「そうか。」

そして悲しげな瞳をしていた彼女がコナンのことを見つめた。

そのとき、コナンの中に眠っていた「何か」が脳内を侵略し始めた。

今まで生きてきた二十数年の間に一度も味わったことのない感覚。コナンに抑えるすべはなかった。

コナンの体はどうにもならなかった。そして彼は求めた。

太陽のように白く光り、とても温かい彼女を。

そして彼は正気を失っていった。しばらく彼は彼女にすがった。

その後周りの音が彼の鼓膜に突き刺さり、彼は求めていた手を離れた。

そして自分が何をしていたのかを理解した彼は、部屋を後にした。

(何だったんだ。あの感覚は!?)

自分の部屋に逃げたコナンはさっきのことを思い出していた。

コナンの胸には疲労で熱くなった彼女を抱いた温もりが今も伝わっ

てくる。

(どうしてなんだ？俺はずっとは蘭を思っていた？あれ、どうして過去形なんだ？)

(俺はどうしちゃったんだ？)

自分の恋心には疎いといわれていたコナンだったが、それは疎いのではない。

感じたことがなかったのだ。

自分の中の欲望に満たされ、理性が止めようとしているにも関わらず手を出してしまう感覚を。

かつて新一だった時に蘭と学園祭で劇をやった時にも同じようなことをした。

しかしこんなに後ろめたくなっただろうか。

学園祭の時は園子の言われた通りにさせられたままだった。

だから本当に異性を求めたのは、初めてだった。

(なぜ？こんなことを思っているんだ？蘭にもしたことがあるだろうが！！なのに、どうしてまだこんなに胸が熱くなるんだ？どうしてあいつを抱きしめたいという独占欲が出たんだ！？)

コナンは考え、答えを見つけた。そして自分自身へのけじめをつけることを決意した。

第十四話（後書き）

ただでさえスキルは高くないのに、最悪だー！！

第十五話（前書き）

ども。この前はコナン目線で書いたので、今回は灰原目線で書きたいと思います。（なので一人称は灰原のことになります。）

第十五話

彼はどうしてしまったのかしら？

何度この言葉が頭の中を駆け巡っていることだろう。

あれほど蘭さんのことを思っていた人がこんな私なんかには……。

でも、嬉しかった。彼の心の中で大切な人だと思って……。

いえそんなはずはないわ。そうよ。

私は恨まれている。彼の人生を狂わせてしまった悪魔。

もうどうすればいいの？工藤君のことは何度も忘れようとした……。

なのに忘れようと思えば思うほど、彼のやさしさを思い出してしま
う。

私は今まで一人だった。

そんな私を仲間として共に過ごしていた日々。

米花町での思い出。

その思い出の中心は彼。

いつだって私の隣にいてくれて、暖かい人たちにめぐり会わせてくれた。

いつだって私のことを守ってくれた。

杯戸シティホテルの時も、バスジャックの時も、

そして、もう一人。

彼の最愛の人にも。

ベルモットに銃口を向けられ、ほんとに最期だと思った時に舞い降りたエンジェル。

悪魔を助けるなんてほんとでもないエンジェルよ。

そう、あんな白くまぶしい彼にふさわしい最高の女神。

今度こそ忘れられそう。

なのにさっきの彼の温もりが今も私の体と心を包み込んでいる。

何で私なんかを照らすの？なんで白い彼を求めるの？

早く告白してほしい。いやもうしてたわね。

簡単には手に入れられないモノをあなたは手に入れているのに。

だから愛しているモノをそのまま素直に愛して。

そしてもう私を見ないで。

やさしくしないで。

だからもう私が彼にできることはただ一つ。

早くあのエンジェルのもとに彼を返すこと。

第十五話（後書き）

第十六話（前書き）

お久しぶりです。随分とネタに詰まってしまいました、やっと投稿することができました。これからもよろしくお願いします。

第十六話

あれから数日がたった。

灰原の風邪も治り、解毒剤の研究を再開している。だが、コナンとの関係は未だに気まずいままだった。

一方のコナンも自分の気持ちにけじめをつけようと必死に考えたが、その答えは見つからなかった。そんな自分に腹を立てようとしたことも何度もあった。だが悩みの「種」のことを思えば思うだけ、あの結論に達しようとしていたが本人はそれを一切認めようとはしなかった。

そんな時、

「あれ、母さん？どうしたんだよ？」

「ああ、新ちゃん。実はね、優作ったらまた出版社の若い娘と飲んだのよ。それも今回で五回目。いい加減にしてほしいわね。」

「そうなんだ。で、母さんはどうするの？」

「あんな男はもう飽きたわ。もうこの家に入れるもんですか!!」

(いや、この家の金、全部父さんの金だろ……。)

「そついことだから、新ちゃん。あの人の荷物全部まとめておいて。」

「何で俺なんだよ!?!」

「だって、あなたいつも推理小説ばかり読んでるじゃない。これで少しはすつきりするはずよ。それに、新ちゃんの悩みだって……」

「何で俺が悩まなきゃいけないんだよ。」

「あら、だって新ちゃん迷ってるんでしょ? 哀ちゃんなのか蘭ちゃんなのか。でも今の感じだと哀ちゃんに傾いてるらしいけどね。」

「何でんなことが。」

「新ちゃんの顔に書いてあるわよ。」

(ったく、この母親は……)

「ああ、そつだよ。」

「そつか、新ちゃんロリコンだったんだ。」

「バーロ! なんなんじゃねーよ。」

「新ちゃん、顔赤いわよ。」

「何言ってるんだ。夕日のせいだよ。」

「まだ日は高いわよ。」

「つちえ。」

と、そのとき

「有希子！！彼女にはもう近づかないから入れてくれー！！」

「入れてあげれば？」

「い・や・よ・！・！・！・！・！・！・！」

有希子がすごい形相でコナンを睨んだ。

「有希子、お前の方がキレイだから。」

「そんなお世辞言っても無駄よ！！」

「頼む！！！！」

その後、優作の懇願は一時間にも及んだ。有希子もついに勘弁したのか、

「入って。」

と冷たい声だったが、優作に手を差し伸べた。

（俺も、あいつに伝えなきゃな。本当気持ちを。）

コナンは暖かな目で見つめていた。

第十六話（後書き）

灰原が出てこなかった!!!

第十七話（前書き）

どうも、久しぶりです。今回から超大シリーズの第一部。LA編の開幕です・・・。

第十七話

父さんと母さんの喧嘩からまた少し時が流れた。

あれから、ふと思うと灰原を探していた……。

蘭はいつも俺の傍にいたから、そんなコトをしたことをなかった。

それだけ俺は灰原が好きなのかな……。

自分で自分の気持ちがわからない……。

そうしていると考え始めた。

しばらくして、灰原が俺の傍にやって来た。

「よう、どうした？」

「さっきから蘭さんから電話が来たわ。それで新一さんが今口スにいますって言ったら、今からこっちに来るって。」

「おい、そんなコトを勝手に言うなよ！正体がバレたらどうするんだよ……！」

「大丈夫よ……。これ、見て。」

と言って灰原が出したのは一本のカプセル。

「オメー、これ、まさか・・・！」

「そう、察しがいいわね。これは私が作った「APT-X4869」の試作品。今までのものよりもかなりいい感じに仕上がったと思うわ。」

「じゃあ、オメー・・・。」

「そう。こうすれば飲まざるを得ないでしょ？」

「これはほとんど脅迫だぜ・・・。」

「そうね。さあ、急いで準備しないと彼女が先に来ちゃうわよ。」

「そうだな・・・。」

そうやってコナンは有希子や、ジエイクに話をつけて、新一がいる状態を創っていった。

「後は、工藤新一を出すだけだな・・・。」

「そうね。一応言っておくけど、薬の効く時間はせいぜい三日間。その間は風邪の症状が付きまとうけど・・・。それと毎朝私のところで検査をするつもりだから・・・。」

「構わないさ・・・。で、蘭は後どれくらいでくるんだ？」

「そうね。昼前にこれから飛行機に乗るって言っていたから、ちょっと待って・・・。」

そう言つて灰原は、ネットでその便の時間を調べ調べ始めた。

「あつたわ。到着は今から一時間半後よ。」

「ちょうどいいな。じゃあ、母さんと行ってくるわ。」

「そだね……。気をつけて。」

「おう。」

(これで……。よかつたのよね……。お姉ちゃん……。大丈夫
よね……。あの二人なら……。)

灰原は少しさびしげな眼差しで新一を見送つた……。

第十八話（前書き）

あらら、PC壊れちゃった!!

でも直したもーん!!

受験も執筆も頑張ろう!!俺!!

「冷やし中華の季節が、はじまりました・・・。」

第十八話

(やれやれ、あいつは……。)

新一は窓を流れる摩天楼たちの流れを眺めていた。

すると有紀子が口を開いた。

「新ちゃん……。哀ちゃんはどうして……。」

「さあな……。ただ日本にいたときから蘭のことをよく話していたからな……。」

そう。

いつもそう。

新一はここで初めて疑問に思った。

(アイツはどうして俺たちのために動いてくれるのだろうか。)

蘭 side

「はあ、長かった。」

二年ぶりにLAの地に降り立った蘭。

(新一、怒ってないよね……。)

すこし気が重い……。

一番最初に新一に向ける顔が思い当らなかったのだ。

電話で言われた場所でしたらしばらく待っていると、二年前に乗ったジャガーがやってきた。

「こんにちわ。お久しぶりです、有紀子さん。それとその大馬鹿推理オタク。」

(何言ってるの、私……。怒られるに決まってるじゃん！)

しかし新一の返事は、

「いいから、早く荷物乗っける。」

という素っ気のない言葉だった。

蘭は余計に不安に駆られ始めた。

・CTU type B 本部・

CTUオフィスの二階。

長官室のパーマーの部屋に一本の内線が入った。

「パーマーだ。」

「大統領、私です。」

「ジャック、どうした？」

「LA港から、入港しているはずのタンカーが消えたという連絡が
たった今入りました。」

「わかった。至急包囲網を編成し、一時LA港を封鎖する。」

「了解。私は現場に向かいます。」

ジャックは急ぎ現場へと急行した。

－工藤邸－

新一は自分の部屋にこもった。

解毒剤の風邪の効果が効き始めたためであった。

それ以外の人間は、全員リビングにいた。

その中で一番辛そうな表情していたのは、蘭だった。

「新一、大丈夫かな？」

「大丈夫よ。新ちゃんは……。それより蘭ちゃん、これから買い物に行くんだけど、付き合ってくれない？」

「わかりました。」

「優ちゃん、新ちゃんに何かあったらでんわしてね。」

「もちろんだとも。」

こうして有紀子と蘭はLAの町へ向かって行った。

第十八話（後書き）

動いてねー。これからもがんばるよ。うん・・・。

第十九話

「ごめんね、蘭ちゃん、新ちゃん機嫌悪かったらしくて……。」

「いいえ、押しかけて来てしまった私も私ですから……。」

重かった。

言葉以上に蘭は悲しく見える。

蘭は外を眺めることができなかつた……。

それは初夏の陽気のLAの太陽がまぶしかったからだけではない。

車はさらに地面をけり続ける。

タイヤやサスペンションは軽快に動いたが、アイドリングが重かつた。

いや重くなったというほうが正解だろう……。

有紀子は原因を考え始めた。

しかし思いつくことは何もなかつた。

OHは先月だったし、足回りは何も問題がない。

変わってしまったのは、新一を今日乗せた時だった。

そして蘭を乗せた今、さらに重くなっている。

ここで彼女はとても現実とは思えない考えに達した。

(まさか、乗り手のキモチと車がシンクロしているの?)

そうとしか思えなかった。

なぜなら車とは機械という心をもった生き物なのだから……。
By 湾岸 Midnight)

- 工藤邸 -

「何で蘭は……?」

新一は頭を抱えた……。

自分を憎んだ。

自分がいなかったら、蘭はあんな顔はしなかっただろうと。

するとノックの音が聞こえた。

「江戸川君? 入るわよ。」

哀の声だった。

「ああ。」

「大丈夫？」

「ああ、何とかな。」

嘘だ。

体も心も大丈夫ではない。

「そう。」

哀は悲しそうな目で見つめた……。

新一の顔は汗だくで、脈はフルマラソンを終えた選手のようだった。

「灰原、ちよつと寝かせてくれないか？」

重い沈黙を新一が破った。

「わかったわ。」

灰原がベットの横の椅子から立ち上がった。

去り際に灰原がつぶやいた。

「がんばってね……。」

新一は返事を返せなかった。

第十九話（後書き）

重いすね。これは・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8640n/>

Mr konann edogawa

2011年10月7日23時37分発行